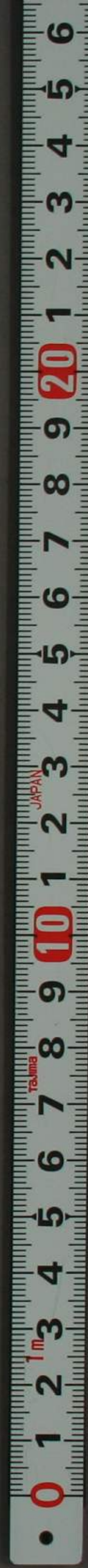


奉使日本紀行
十三之五

特別
ル 2
3138
5



3138
2



奉

使日本紀行

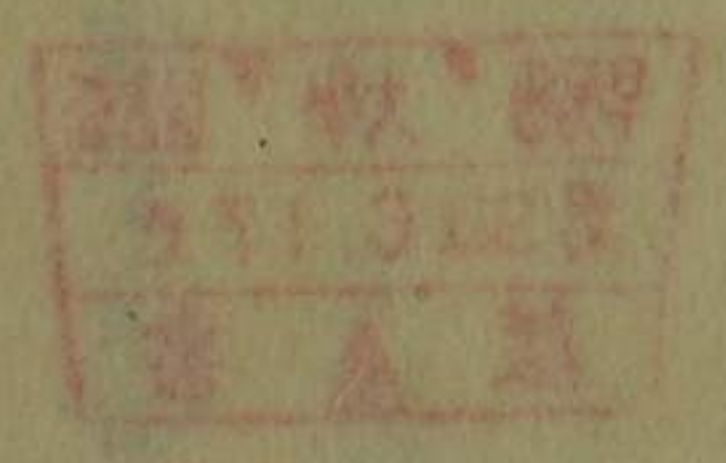
第十三篇

第十四篇

第十五篇

北
敬言小誌

卷第廿七



門 九 2
號 3138
卷 5

奉使日本紀行

第十一篇

第十四篇

第十三篇

奉使日本紀行

第十一篇 長崎湊の記

今先因に歐羅巴人の始て日本を見切せしむるを

辨む

歐羅巴人の始て異國を知らるる有名の遊士ロブライスト
マルコポーロを最初とし 自往此島人は千三百年代の

早稲田 大學 図書館
昭 30. 6. 17 受
藏 書

尔後千六百年代の年に波爾杜瓦ルのヘルマントメンデス
 ピントと云者千五百四十二年天文十一年海賊の魁たるサミ
 ボテカ名々媽港より琉球に遣る支那船に乗一日
 本海濱に漂着せしより日本國の事を始てたし（此の事千七百五十四年把理
 形と著る書にあり）然る同年又波爾杜瓦ル
 と名人日本薩摩の海濱に漂着せし頃と此之人と彼
 人と行はし先何れ後何れと辨へし其後伊初把
 係亞人も日初より此國と非利皮那諸島とを以て

されハ此例に四買遷を利益何へしと云ふ事と物と
 尔後其の事とあり此伊初把係亞人も元其貨買
 遷より日本に到りたり小艇の舟に漂着せ
 其の事其後千六百年慶長十
 四年マニラヒリブ諸
 島の内此
 總官新伊初把係亞に航する途中日本海上
 北緯三十分の所を其船を敗り日本海
 濱に漂流しし頃日本帝より彼徒を諸尼利
 亞のアダムスと稱し北
 亞フカブルコ北亞墨利加の墨
 貝可部中の府也

送る致さしむ此子由て予六百十一年度七十伊那把
 係重王より使節を日本に送る多し信物を齎
 らし謝りし尔後見よて耶蘇教を禁絶せしむ
 伊那把你重人も波多杜瓦人も日本に送る
 を林止せしむ此時より阿索陀國ハ七列一
 致自立の國なり 皮富強して印度地方此交
 易をたしむる者未だ印度中其領する地無と
 伊那把你重波多杜瓦人も多し其大利を得ず

と之を日本と交易をせんと欲し其の終り幸に
 明の由りなる其初阿索陀船一艘日本の未
 演へ着すは是ハ予五百九十八年度七十彼國
 海船總官マノフホ及シモンコレス此令よてテキセ
 ル和索國ソイレセーより東印度に去る商船五艘あり
 北北小島一艘ありて其按針後の首ハ諸厄利再人よりて
 イルリアムアダムスといふ者也彼阿索陀船四艘
 はマケラーン海峡南亞墨利加より南海に航す

時子よく破船をアダムスが船に獨難を免
建子六百年 慶長五年 四月十九日 日本豊後北港
北緯之千あ反之千分れ変子着せし之アダム不幸
に日本帝れ^意適て厚く思を蒙りし日本
不返るを留て日本に逗留せしむ此事阿茶院
人よりバタビアに商侶に傳へ子六百九年 慶長十七
阿茶院の東印度商館より商船一艘を装して
日本に送るアダムスに依て交易の許を請る事

に連し許を以て遂し子六百十二年 慶長十八年 平戸
不其商館を開ぬ此より今に至り阿茶院人幸
より日本に買還す事免され毎年小船二艘
をバタビアより日本に送れり其後波爾杜瓦
人のより依て阿茶院人一旦日本を遠斥せし
是より子六百四十一年 寛永十八年 平戸に商館を
出島に移し 慶長十七年 之請 厄利亞人も同
年よりアダムスに紹介して平戸に商館を置る

と許さ水利河の交易をも免さししめと問はしむ

あ、ね 自注云エニチカス北ナルヒストリイ書名に於て
日本帝よりヤコフ王に買遷の約を乞ふ所の

書指厄利亞東印度商館の甲比丹ヨハン
サリスと日本官人の名を載せしむるあり 但何故に 七一や

縁故を乞ふに 諸厄利亞人ハ日本より 遂斥せられ

一輩北極小艇を以て阿柔院人の彼國より物と諸

事も也其後諸厄利亞人数日日本に買遷を請ふも

も成らず子六百二十年 寛永十四
年丁丑 諸厄利亞船四艘と

海船總督 ウラゲル北令より 媽港に送りしむる彼國より

交易ならんは夫より長岑に至るしめ其許を得ざる

自注此事 シンケカス
北記云云云

千六百七十年 延寶三
年丙辰 又諸厄利亞船一艘を長岑に

送りしむる 亦交易を許さず 諸厄利亞加州 兄弟

一世王ハ波爾杜瓦爾王姫と婚せしむる由て 日本人を拒

めしむるなりと 千八百三年 享和元
年癸亥 即秋等々 俄羅利

國より 船を乞ふに 頃或人 日本に 船を乞ふに 試

しむる 又 功あり 其れハ カルキユタ 加兒塔多印度西瀨地の名 諸厄
利亞人據有する 廣明

北濱厄利亞商某一艘を裝ふ甲比母トイをて
貴品を積り長寄ふきりし日人令して二十四
時の内日海濱より退き去り又千台一年享和及千台二年
享和二年亞墨利加通商の舶を少く減らし因
功有りき拂部商人日中を訪ふ者あり

如此既二百五十年末歐羅巴の諸國の人日中を伺ふ
特に長寄の二百五十年末毎年来り通すこともあり
其地の経緯北冥測濤港の精算等歐羅巴人の手り

成

キム、ク

と云ふケニフルカルレホイキストンベルグ等

の長寄の北経度を記すことも皆詳あり且濤の島は
ケニフルの載すもの甚多ありタルリムプレ此集り
萬國地島の管台冊に長寄の圖板あり是濱厄利亞
人及和蘭院人の記録あり所あり然るも是もケニ
フルの島より好くはすくくす唯其圖中日本南西海
濱北緯二十七度にも岬名傍及長濤を處し
は頗る審にせしものたるを又最審なりと云ふ

は拂部東地迄取バルビイデニホカケの圖集ヲデントシ
 カスアウキス此遊ヲ以テ得ル所ラビルジニ此著ヲ附
 するもの也其経緯ハ我等ヲ驗ル所ニ僅ニ差ハ而已
 予思ふ 形ノ符合するも亦是偶然出るもの也如何
 と是を以テ予六百十二年度長十七年の月蝕ヲ測量セテ外
 江長崎ニ於テ星學家ノ測量を為さんとす此月蝕
 媽港も長崎と共ニ測テ両地ノ子午規ノ差一十
 秒を以テ媽港ノ経度ハ百十二度之十七分十九秒測

此所下條
に詳なり 是即長崎ハ百十二度之十七分十九秒なり
 其経度此等ニ二度四十分一を差ハ里を以テ星學家
 此者等ノ以テ為テ測量ハ予々之を知りしよりなり 累保
按
此真経と云ふ者陸ノ実測なり
知るハハルニシテニク測考
 此子六百十二年此月蝕ノ測考地理初此學校ノ紀帳申に
 載す其下條の如し

子六百十二年第十月八日度長十七年
十月五日 アレニイ及ユニシ名
 媽港ニ於テ月蝕ヲ測ラシ其初虧第八時三十分復

圓等土州軍をなす又スビラ名長崎に在る
 之側より其初虧第九時三十分なり此由を知り媽港
 之長崎と時差一時を以て其度と隔り把握なり媽港ハ
 百十一度二十六分長崎ハ百一十度二十五分東京
 と也

媽港に於て測る

西暦
 一千九百一十二年十一月八日

日本京師
 和京時差 八時四十分五分

初子
 八時三十分 全長崎 八時一十七分四二秒
 和京 八時一十七分四二秒

右の内マコウ 和京の時差を長崎マコウ一時とす

和京月日とす
 マコウ 七時一十七分四二秒

即子西百一十二年十一月八日一時一分一八秒

日本慶長十七年壬子十月十八日二十一分三秒一四

媽港に於て月令測量其年月日 西洋曆日を用て

千六百十二年十月八日

初子八時五分 復圖十一時四分

同書に把理刻媽港距六百一十二分と云是より
里差を求め即七時二十五分四秒なり以て右側數を減
て先把理刻の數より而して日午所當北月日を求む
把理斯

千六百十二年十月八日

初子一時の四十分一六秒 復圖四時一十九分一六秒

本年日午年紀度長十七年^{壬子}

本年振日時分^閏十月二日時四十分五六秒

前年^{辛丑}十月大冬至廿一日十二月大

本年^{壬子}正大二小三大四五六小七大八小九小

西本月責日三百〇四日

全相距日時 初三百十二日〇一時〇四分一六秒

本年總日時 復三百十二日〇四時一十九分一六秒

初三百十二日二時五十分一三秒

復三百十三日一時〇八分一三秒

余日九日

當日本慶長十七年 壬子

初子十月十八日子後二十一時五二分 一二秒

復圓同十九日午。一時。八分十二秒

スビノフ此測量ハ初子此よりして全切りさしハ長壽の経度
も審詳あらば 但媽港の経度の既二百年前よりかく緊
密此測量者ハ齊とすし此測ハ近新の精測と僅九
分十分此差日く其緯度も於てハ子六百十二年右の測量

家アレニイ及ユレマンコ側定を一齊に二十一及二十二分也

甲比母ビユル子イの南海最明の測量紀ハ長壽此経度
を測るるを載る甚測ハスビノフの測より後より別より
或測り了今の実測と僅ハ差五分而已甚測ハ百三十分零
六分 東とす是ハ對馬の経度と其島と長崎の距離を
測て此経度を算定せし能る是對馬島北隅の経度
ハラベロウモ及ブロットンの測り所とケンズ及ハレニテイ此
算考す。 経度の差と比較折衷を以て之即對馬

北隅の経度如左

ラベロウセ

百二十九度三十七分

フロウグトン

百二十九度三十分

其中數

百二十九度三十分三十分

自注云此北著を思ふは對馬島の北隅を百二十七度三十七分又グレーク北東
百二十九度五十七分と有り紀行等十四篇も載りエロウセの對馬の経度
と有り百二十九度三十分と有り
。景保抄載 不通姑く直譯し終ふ

對馬と長崎との經差をフルは四十分なりハレンティンハニ
十五分と有り其中數三十分三十分三十分なり
自注對馬と長崎の
子午規差は今三十九分

と定む此より百二十九度三十分三十分
に三十分三十分を加へて百三十分三十分なり

コノイサンセデスラニス書名は經緯度の考を擧げ長崎の

緯度は八十分の儀有り又千八百三年^{享和}甲比丹ナレト此

測り所ハ町字ナレト其側ハ長崎と北緯三十二度四十分

五分經度グレーク北西二百二十九度四十分と其側^定

北從ハイントスナレト別子午に從^テテテ此ハ諸厄利

亞の一人東印度子航海ヤリト有キ者ナレト傳え聞^ク

所ナリ此甲比丹ナレト長崎ニ在テ僅三十分^小時^{十二}

此図形とは其例より経度の予り実測と事致すと違ふ
と此を以て其緯度此連ハ意より之

長崎此事ハ歐羅巴人の為ニ 意を事し予此航海驗
知よりた者故然止せんハ予亦阿茶田人の説を事と隠
す者と得る一し因て予習て此ヲ開る事と記之
後考し備へ且世子傳んと欲せん見我國家の者此輩に命す
る所より習て世界未審の事を強明せん一端あれ之
五の輩を信し於て諸國を以て其國の禁別あり其海灣を舟て

廻り及その事より上陸するも能くはまも長崎港の測量ハ
苦辛し其明細は終り此記を著すとせむルとロウニス
テルン此力を備て成終り也 是船の在り不針及梅
の寄れとき変りて測量し彼地隅角の測數を集め
相比し以て其地経緯の定括を卒之然も前より如く
國禁より遠りまて港口兩名の由湾長崎湾を成さる
諸島間の江漢及長崎の北側等と詳し親と能く其特子
長崎の南西湾口にも見ざるの深く遠域なり島間の江漢

ハ礁石多く日本人の小舟を以て其内を往来せざる當
ノ意を用ハ大船も其内に入らざるの如ん此港ハ無雙の好港
トシテ港の出入ハ兩口有るの程其舟行の常路の外も
沿きと我等ハ例知所ハ此水底を測るも日本人ハ
彼と異なることと我輩絶へず之を測るハ今
此記ヲ以テ航海者の爲ニ碇泊の要ヲ明サシメ
予尚此ノ星學航海術及候氣術ヲ考索スル
試驗ヲ附シテ頗その明細を要スル也

長崎港は北緯三十二度^度四十三分四秒西經二百三
十度十五分^度南ハ野母岬北ハセウロ岬^岬
也此ハ右湾を成す所謂九州海湾の中央なり又島
岬ハ北緯三十二度三十分五秒西經二百三十一度十六
分在テ此港ハ其東北五十一里とす五島の東隅
ナリ此港ハ僅に三十三里なり又島ハ五島ナリ北東に
續キセウロテ岬ハ一連の小礁島を以テ相接シ
テ其間ヲ舟船ヲ入るが事ナリ日本人ハ小舟ヲ以テ

渡へしとこ里長崎港を針路を所んは標的の及を
てり支弁れは長崎の海濱は甚多山なるを標的とする
と明著なり 燈母岬 セウロテ岬も其地高からん
之を反して長崎の地は山は圍くその山嶺平なり中
小南側は一高尖峯徑早起て著し 按長山 其峯
を名
港口の南側の東より港口へ針路は西島と九州
地の中間北差東より向ひるなり又直に東より向ふ時あり
港口の中央を指し此の如く向ふは遠し長崎の後なり

山をえりし港口は進て九里千里より及へるその南側に
一樹獨立せる島をえり是伊王島なり此樹は相
隔と十里より南の東八十五度再之をえ其の線上
に前より尖峯とんは此標的は由は港口針
路を得るをあらん然るは九州の地をえりて直に針路
を燈母岬に向け其偏は沿て航路は風が潮疾く
礁石觸んの危何れもその港口北緯三十度四十分は
なり容易にあり然る甚危険なるを以て針

跡を取者あり也

野母岬ハ九州海濱の南陽より北緯三十二度三十五
分十秒経二百三十五度十七分三十秒子何れ此岬ハ数頂
何れ山よりてをくえを望むハ一島の如く近きはその
前ハ一礁の著しき何れ此岬と港との間ハ礁石小
島多ク一高く徑年へとも何れ又その内ハ長崎湾のバー
ンベルグ島此島此如く林蔭より頂より樹木繁茂せる有
此礁島の後ハ湾也其ありその南濱ハ平水田畝何れ

此より深く陸地まで總て多山重疊一長崎の北東に
連り皆樹木繁茂せる野母岬の後ハ南東は向ふ湾あり
其岬ハ深き湾也何れ日本人の号ハアリ之湾と名するな
る一我輩の至るき所なり其地の尖端ハ北緯三十
度三十二分経度二百三十五度十一分なり
景保按其地の尖端と
子島の何れなり也

北緯三十二度
東經三十五度

セウロテ岬ハ野母岬より北の西三十一度三十分ありて二十五里
を離れ港口より北の西三十一度ありて十七里半を隔

川北緯三十二度五十分三十分秒經度二百三十二度二十五
 分とす此岬は甚高き山とす其の南東の地低き如
 著しく見為其地地より漸く北より高き山とす其の南
 ノ岬よりハ山多し其岬の南に諸島多し其の内
 岬と云く最大をナトシマと云其最南の岬をキトシマ
 景保按此二島と云此二島ハ我船此海灣に入し廿
 高きものあり
 我九月五日と港口に初め碇泊せし所より
 同月九日とより見ゆるに等九月十七日
 文化二年
 九月十八日 我船此地

初め時ハ天氣悪く此海灣の北部を過ぎし我船も亦
 ル子ルと口ウエニスレルは其日此午あり各地の隅角湾中
 の礁島を望み測量前の等十月八日九日此測量と比較
 一諸島の位置を並しセウロテ岬の測量を定めぬ
 長崎港外ハ三道の碇泊あり第一最外なるハバーニル
 島の西あり第二中央なるハ同島の東あり第三最
 内なるその内なる此港に南に伊豆島の北端北は
 福田等
 自注此時ハ別な名あり其島の名は伊豆島ハ大
 湾に在りて其島は在る處按福田村とす

港への門を其両岬端北の東と南の西と四十、及ふ
して其相距三里と五分里の一なり港口の中奥深三
十三尋我船此に碇をり其海底細砂、灰色の沙
なり此して風外碇的效に吹又東差南東の又差東
に碇をり其深二十二尋なり二十尋なり其底
粗き緑色の片石なり細砂を覆えり高嶺島の
西の碇泊所は北西風と西差北西風の即ち皆防く
所なり其時不引北西のモウシ風強かりて

船を泊らむは安穩にして碇泊交番好なり
初我船八其所に繫りて其碇を巻揚る風も強
なり是は皆力を擡て揚り也又再度此交番に繫
は唯一夜の碇をりて其碇を巻揚る力を用ひり是故に
碇を引て是りぬなり其第二の大碇の代りに只投
碇を用ひり此碇をりて西差南西に多しなり
伊豆島の南に南北凡一里半其島の山脊平地有て

少の家居有り島の北部山頂の半に一樹特立せる
有て遠くより望みく實は港口の表と一且海より港
を全むの目的とありし此一樹より北東に向て山脊の
一部は一村あり林を以て繞りて夫より四分里の一許は
濱は一礁あり我船の此より来りし時満潮を以て見へき一記
伊王島の東は南東より又一島ありタカシマ島といふ
景保按香島は伊王島より南稍西よりして香焼島よりハ
遙く隔るる言ふハ香島は香焼島の西部を占むる
間ハ僅く半里を隔りて水中に礁あり支那船の嘗

を通行するを平安の航路と云ふ也香島の北東はカキヤラ
シマ島 香焼 といふ一島あり是とも香島との間を狭き
瀬戸有り 或ハ其端ハ狭地を以て香島と相接す也我軍
此を見ゆる所無きとも必其間ハ小舟を以て通すべし
所ありて因て此兩島の一端ハ相接するものとして我軍
もも 載る也 景保按香島といふものあり香
焼島の西部を指すは固より一島也 香焼島の北ハ
礁多き島ありと云 又此より北東は雜として周りに王半許
あり アミヤプル 薩の尾 といふ小島あり 香焼島と僅く

四万里の一を離とう其島の北東隅に守舎有道子
ある本総幕を張て砲鏡等の武器ハミテ日本人の言
此島の周囲の水中は礁多ク漁又魚網を破らるなり
アミヤブルの名有りトアミヤは魚網を云フルは破裂を
云ふ最外の礁浦をハミヤ島香焼島カントイ島アミ
ヤブル島相次て南西より南東に延連其東二里成
去て陸地之北東をハベニヘルブ島^高と北を神の島守
神の島は周二里許有り西に而て於礁島数多相連

其間ハ小舟も通す云々其島の北東隅は小砂洲を以て
後ハ陸地とハベニヘルブ島とは各狭き瀬戸を以て小
舟を通す云々神の島の東隅に守舎有
シムホ^陣と名く我船の繫きし處ハ流云々守舎有り
其をより伊王島の樹ハ南の西ハ反ハベニヘルブ島ハ北の
東七十六度云々伊王島の北隅ハ北の西ハ反なり
我船の出日時の殆前云々と同く流云々此所ハ礁
也

中央の礁泊地はバベルク島 詳 北東より四方に土地有
 最内の礁泊地と仰ぐに難の處に其海底に礁を
 下まじり宜敷 最外の礁泊地は次を好む其西のバベル
 ルク島は同僅半程然れ港内諸島中の最高きもの
 也時よ山の西側下より頂までふ二行の並木ありて
 著し日本人の此をタカホコシマと云ババベルク北名を
 日知りて 耶蘇宗を遂行す 時よ法後等此山より
~~身~~身を投じりし 起ると也 ババ業法 僧侶と云 其南西に網

破島香焼島 留島あり 又より稍南に流き 瀬戸あり
 海に通す然も其南西瀬戸の内外に小礁島多く相連
 せりと見え舟波撃くはバベルクふをまじり難之
 とするなり 其十月一日 我八月廿八日 北暴風の時に阿基陀船は
 最内の礁泊地に在りて風を吹流さす 其時中央の
 礁泊地に数島あり 支那船の碇も亦あり 阿基陀の碇も
 あり 然らば 風を引りて 其南東に瀬戸
 北右の流す 其より 府に通す 其北東に即長崎の

明り其北差北西瀬戸の左瀬戸の一部長崎府と津島の
間最外瀬戸の深さ二十五尋ありて瀬戸最内瀬戸の
深さ十七尋と申す唯意を以て(きき)バシレ
ク此を傍と此を對する陸地のを以てして外水船を行
はれざる一但バシレク此方はは瀬戸の長凡十八尋
より二十尋ありて陽見は絶て老き事外一阿蘇院船の
出帆なり一此に於此事もバシレクにをく通り
バシレク此北東半里より一小島ありて平なりて樹木の茂

せりノスエミマと云 温風島の義あり其大さ殆バシレクに
齊一此島より百二十尋を去てキバツ鉢といふ小湾
あり此の尋より十尋あり此の島は長崎港内より
船を修補するに使用あり如何とあるは瀬戸最内
の瀬戸深し船を近く寄つてされは水木鉢の花
濱に竹柵を圍ひ我船を修理せし地は僅船の長さ程
あり也
初め長崎より本島船の唯真直より外瀬戸を以て入居れ大

我船は已敷里北外より日本中舟は行きて直に港に向ふ
と成りしき日本舟は道すかたされは其時南西の
モラツン風は棄り危事なり中央より碇泊を以て
へきり彼日本人の教導は合を量りてしめてそれら為
に港の中なる少の風も尚ほきぬぬぬ度は二日
此間船を留めしむるは且日本の引舟百艘許りて
我船を引られり^る教導の引綱を切失を思ふと
たは心痛せし也

中央の碇泊を以て最月の碇泊は即長峯府北の東
四千里は南り其相離二里と三分里の一なり其北途
よりしては港の洞は百尋に及む其南側は砲守
令の如きなり然るも其牆壁の固めありとも但此類
此守舎は港の両を以て小見くしり港の洞五百十
尋^或三百尋に及ぶる変も有りて其日本人其変を
堅固するの法を志すは長崎の守舎は奪ふべからざる
要害の地なるも然るも尚ほ其時有りしは歐邏巴に

貨部 昭日漁部は殊あるは第一の**カシガト**の軍船
大船二十挺より 一二の焼舟船を具ししは日本人
五十挺迄を備ふる 力故盡し防は非されハ暫くの内には此處ハ燒亡也
守令をき 右濱ハ小湾方て常に小舟多く繋ぎあり
おあすに甚深き大船と浮きよりぬべし長崎港
に如此小湾敷敷 何れも云小湾ハ其内北第一
とす所ありて其地の景色 画多かりし

港内の水底も中央及最外の碇泊處の如く底の爲

に軍一が其底細れるケイありて 且港の南西海
の方面を以て屏障なくバーベンヘルクに色き
此風を防ぐものあり ナデスタ 船ハ出島より四百尋を
隔て深き草本の島に泊り 出島は北の東四十度
小島より使節ハ居ルムメガサキは其東より二
百尋を隔てぬ梅等には其郷人の庫あり其底
北一二を我々の用し當りたり

本郷と梅等の緯度の宮測を以て漢の島より度數

如左但長崎府ハ其中央をとりて

長崎 三十二度四十分五秒

本館 三十二度四十分十四秒

梅寄 三十二度四十分零二秒

出島 三十二度四十分十八秒

港口 三十二度四十分四秒

経度ハ月の距離を測りて得たりホル子ルと云々と云ふた
事よしより各法を以て測りて得たり所ハ月の西

太陽の距離二百八十七と以て算して本館の経度二
百三十二度十八分零一秒を得る事

月の東太陽の距離二百七十七

月の東太陽の距離二百三十分零二秒四十一秒

是故に此距離より四の申數 二百三十分零二秒

ホル子ルの測り所月の西太陽の距離二百零四の申數二
百三十分十九分。

月の東太陽の距離二百三十分零二秒

是故此距離四六回の中敷二百三度十分三秒
又本針の程度一〇二八の距離は中敷より^經二百三度
十分二十八秒西府の中央本針の東。云々三度
長壽此經二百三度七分三秒
〇八分〇〇西港口二百〇三度及十分〇〇西
諸洲の中敷より從ひ羅盤の差最外と中央磁泊雲に
於て一度四十分三秒北西是と云々

其針の傾き暴風の時に全損しと云々

我々長壽に居りて初の三月八日船を離りてあり海潮の
驗をありと能くしあり此後一月二月三月
三月第四月まで此時八日船細家より島より葉針者
西人をして仰り前を測らしめ又後の六週日の間毎日
一時毎之を測りて皆喜此一時は八次^或十二次の測
をあり其時晝夜平ら此は自然の事なり
ゆくと別して云を用いし經も我々還るの初の月
之をありと能くしあり送懐也但潮の驗は長壽北濱

湫最可なり其變ハ暴風^涛湧然坊りく其水常に靜
りて干満も平しき故に阿蘇院人の商館に困時多
きれを一の天行を委しき海潮干満此測量も容易
にぬべし彼々測量を形も所へ

潮の最も最低の測數ハ數測平均の數を以て定む其の
測の^進退此間ハ潮測をなして其中數をこまき朝^望
満即ハ七時五分 早一初あり總て最も最低の始
ハ朝堂^弦下^弦の後三^弦四の潮あり最も後四月二日

我三月三日 即新月後二日大陰地東視差五十九分四十分
其緯水三之度十五分一^寸潮の高十一尺五寸と云
風ハ北の徐風なりき最低ハ三月二十日^{我二月廿六日}即下
弦後二日大陰距最も後二日晝夜平均ハ此後三日に
一^寸潮の高一尺二寸と云風ハ北の微風なりき
長崎逗留六月此間我々務て氣候の測量をせし
此事ハ幸し好き氣候なりて特に初月ハ最良の氣
候なりを云ふ是れハ前ハ大暴風及此大氣を度

條して清浄なりしむるも因るん亭此下毎月の氣
候を記す

千八百零四年 文化元 年甲子

第十月 賊九 此月初一日の大暴風より引續て北東風
多く時々北西風となり又暫時ハ西風西風となり且
快晴より廿四日正午より二時許雨降りしるる色なり
天氣儀の最高晴日北東徐風の時二十九寸九九日最
降水量日南西の~~冷~~風の時二十九寸六三なり 燥濕儀の

大濕の度ハ四〇と寸カエト申し置る候儀十日卯申

九時 辰時 二十度二を最多とす 二日卯申七時 卯時北

東差東 涼風の時十度四を最際とす 但燥濕儀も

氣候も日し甚き變り易くカエトに據る氣候儀

ハ毎小四五度の變を顯ハす 卯申六時柳より日午

にむら毎小九度十度を差へて此海湾毎日卯申

九時 辰時 申す付雨層に覆ひ此の~~雨~~は冷温の變甚し

自注 燥濕儀の大濕の候ハ十度
大濕の候ハ十五度より十八度なり

第十月 我十 凡常に北東風ありし四日即新月後三
日南の大風起り而海晝後凡東より南東差南に
廻り子夜より忽北風と變て晴ぬ十三日も前のとき
大南風は暴風を多ぬ是ハ望前三日なり廿八日即新
月前三日も大暴風東より起り數時の内吹く霧ハ
遙冥にして多き時ハ朝ハ屋を氷を洗ふハ古語の
事と雖て予^年月^中を夜露は深^く試^みつ少も也を愛
する事ありき此月ハ氣候甚安し然る時としてハ

甚温又寒より急に暖に變ずる事有り証言ハ
十二日は氣候儀朝ハ十度の温して日午ハ
二十度と有り晝後第十一時^時は午四度に
至り其おき方同時には十二度に減し又次の日ハ
八度の温と本大抱朝^時七時^時柳^六度の温と男
多ハ掃^りて^減四度半四度と本天氣儀大^極
高く晴る中等の北風より南の間も三寸ニ云
又三寸ニ此間に左南東の大風又南風也

日二九寸六六二第二も何也

第十二月 臘二此月未二音南の暴風 西河外ハ
以快晴美二雨ある二凡ハ二時の間南
西風起二の外常二正北風又ハ北差二西風二
空二冷二二度降二七二初時二辰二一度半
降二無風也

氣候儀ハ七二西差南西風の中二水銀八日降二
て十二度二天氣儀ハ最高二終月二三寸を

降二寸又救二三寸二の二二平九日南西の大風
此時天氣儀最早二十寸の内二四寸を降二二平九
寸七七と二毎約九寸二半二八寸二深く大降二の光
畔を降二後晴二此霧ハ他の月二怯晴二の如二
也但南風二少二七二霧二河を二燈二儀二の二
全二く霧二又二同二と二

子八百零五年

第一月 文化元年 甲子十二月 冬六二管二より始二と二何者皆ハ

前月より甚きく解言ハ二日ハ北差東の風を晴天
外きとも水浪ハ極き點の下一度^に在^る午一日初五時
定時^は尚^も一度半を既守但晝後二時^時未^は十
三度半より升まり如^し九^時の同^じ升^り既守^は一度半
差^も天氣快晴^も水浪の極き點より既守^は僅
き一回なる而已其他^は一日の時刻^は僅^き甚^き差有
とも申^はぬをいつ^は日午八時に七度より十一度^に由^り
朝六時^時柳ハ一度より六度の間なり 風ハ常に北差北

東又北差北西^{なり}又南西或南東^ハ毎^も風^ハ烈^し
但暴風^ハ多^し唯南風の^は烈^し北風^も何^れ之^は隆
一次北風^ハ甚^きく雪^ハ霰^降り諸山^ハ暫時^の間^も雪^ハ掩^れ
るを^もらる^る暴風^ハ雨^の起^は前^月の^とく^唯初^の頃^の
頃^{なり}雨^の多^きこと前^月の^めき^ハ稀^しりて雨^ハ多^し
必^は快晴^の地^{なり}又^は燥^濕儀^の大^濕温^温の^度を^顯す^る
大^海又^は海^の度^{より}も^稍高^し天氣^ハ低^き常に^高き^り
云^す寸^に過^ぐ

第二月

文化二年
乙丑正月

此月と第一月とを僅く冬の月とす此
月の末は北風なきも其氣候温く未始めたる哉
是等風の常に正北又北差北西の中寄りて強弱を
此前後に到りて吹く有十六日十七日北差北西の
風烈しく雪や散を降らざり兼候儀ハ極寒點の下
半度より降り又降る此風降ると故次何れ但北風は
に多く或南西或西差南西の餘風も少くは然
久未續不守此月の盡後忽南西微風となりし

一時時と過りて此ぬ天氣儀ハ常より二寸の上より
唯二十九日西差南西風より大雨なり時二十九日
に降る強きも爪其初り後して又二十寸より升きり
氣候儀の最降ハ常より五分也其最降ハ南東の餘風
四寸より五分半又十五度四分度の一となり湿度儀
此變ハ前月に同

第二月 此月ハ他月小比ききは暴風多し一風毎
小南西より烈しく或北東風有南西風ハ常に雨を送

本日日本人云此の時ハ南西北 モウリン風を以て候する
 此風五月の初より終く候也と常に朔望に前後三百
 天氣何れ多く殊に此月ハ何れ多かりし春分の後言
 には南差南西の大暴風何れ我等長崎逗留中
 此大暴風ハ春分後日下弦後四日ありて廿六日夜
 中より廿六日にあり南西の大風起り廿六日南西の
 南東より廻り後又南差南西の候其風疾甚しと
 晝後より大暴風となり日本人も此を大ニテトシり

天氣候ハ二十九寸六分乃高き也然るに此月廿七日
 及び三日れ五日ハ廿六日よりハぬき少くして及て候く
 二十九寸六分好き子八百零四年癸卯十月一日候
 元年分共白ハ此より三寸低かりき是ハ亦く此等ニ候
 山嶺より申て天氣候を以て如此不測の言を候しむ
 るものありん先子三ノトヘルハル港まで候き一時の如く
 氣候ハ前月の如く甚重易く南高風より吹て北風と變り
 る時ハ甚重なり氣候候儀ハ二日と十六日に十六度制之

と最言より五日と十二日八夫より二度或一度半降を
最低とす燦濕候ハ十七日の南西風大雨ハ甚濃の
後五午五度五ふもあつて是れ我等ハ今迄ハ見所の最
高候也

第四月 我ニ 我等長崎を出帆より十八日午後北東の
モウリン風あつて十分あつた 十九日北風又北差北東風
あり四日より五日より朝後四日夜北差北東の大
風あり次日快晴と成り風徐きて天氣好

十八日即ち午後言我船出帆して後暫時南東の
大風起り二日の間續いて後風静まり第一時天氣
儀此月の半よりハ三寸二分半候言あつて降り始り
長崎より暴風雨の時より 候ハ二十九寸四〇と相異り
風ハ北東より稍強く但曇^暗晴の天氣あり氣候儀
ハ四日北東又東差南東の緯風より終日二十度候也
十七日ハ全静候日より十八度或十九度を言度
とす 朝十時時^己より夕六時^酉時^酉まで其度より保り

十四日卯六時 卯子六度好を最^低早とす大抵八
度より十二度北間好星

一月より方陽西へ距離の數二百廿七 此數度數の多や又
外より其數何れも不知

此數を以て測得る方本紳の徑度二百二十度十八分二秒

一 東へ距離の數二百七十七
此數を以て測得る徑度三百三十分二分二秒

右兩距離數合五百五十分四分二分一 平均數
云と定む
秒 兩側折半
北數好星
ナル子ルの測

一 西へ距離の數二百〇四

此数を以て測得る方 經度二百三十分十九分

一 赤い距離の數二百三十分

此数を以て測得る方 經度二百三十分二分十秒

右兩測距離數合四百三十分四秒中數二百三十分二分三

十五秒

兩測折半の數也

於是又兩人の測數を平均を 距離合

一千〇二十八中數平均して二百三十分二分二十八秒

一

府の中夾の長崎の有り

本邦の赤い三十分三秒と有 此数を以て本邦

北經度二百三十分十分二十八秒西の月を減して二百三十分

七分四十分三秒長崎の經度と有り 然るは本書に二十八
秒八分三秒の誤り

右經度を測る日 月距離

用る某地合朔後某日

太陽南中時測る所の距離と云ふ事 是を以て測る

數と比較して時差を得る也

但月の視差は此に

此測法を求

るに其自行の疾もを用る事あり 故に右法を用る

歟

右率考行高津勘考

奉使日本紀行

第百十四篇 長壽寺出帆日本海に航す

子八百零五年

文化二年
乙丑

第四月十六日

三月十七日 晝後三時

日本人より阿蘇院^又強^礼を^礼持来り使節を授て通詞告々^ハ使節を船に送り^ハき船を備へ^ハ明朝梅舟を出て船に移る^ハと又奉行の令也とて詞を正^シ言々^ハ使節船に乘移り^ハは速に此港を出帆^スと我等^ハ亦より片時^ハ早く出帆

ちん事受む所を却て日本人に隣へらし延引せんと
試みたり折れは予此相を固く苦之るハ
我方に於て少も難事あり今より直に船
中に出帆の仕方をあつむべしと云ふ

卯三十七日

十八

朝四時寅に船の碇を揚七時卯に船

砲を船中に陳列す十時巳使節船を通る其
送る來きる船筑前屋に属する船と相見し
錦り絹の幕を張らばとも使節上陸の地を用し

肥前屋の船此美祿屋行し小舟を以て又使節を以
別の船に乗しむ使節を送る來きる日本人は官
四員と通相教人なり又一個の使節小舟百艘
を従へ來り我船を挽しむ此小舟も筑前屋に
属するもの之其外は二艘の幕張り小舟は各楫
子六人ありて国旗の青き木綿の袖大形の衣被
着し艦をとり其船には屋敷に幟章を建し
是十二時午此小舟五行し其以我船を牽行

ぬ此時又一艘の山舟を船に漕ぎ来て使節の使者
火業及兩日の食糧を送り入る且奉りしう救糧
此種物を贈るは我等の力に推乃行んと
欲する品なきは此事を以て別上意を以て贈
寄らんとす也又船中諸士とて烟州百五十
斤と蔬菜救急を惠りぬ又日本人云々は
暇船後其日用のしき食糧を送り来りしと我等
固く之を辭せり 船を牽て高鮮島の東側

おとふんと云々 船中日本人は頼くハ言鮮の西側は
破れしと云々 是は其の變ハ阿蒙泥船の破れし
多所如きはと云 船中諸士とて 我等は何ぞし
實ハ船を牽者等も早く事を終り我等を別去ん
と急ぐ如きは皆同意なり之即^登後四時神に我船を
二十四等の兩子破れし見よ 船中日本人通詞等 我等と
別を生きて其因を 作之郎 大連洞 中山氏 と他兩人ハ我
輩を阿蒙泥人と 殊別な事を知りし 至外衆

人ハ吾ノに バタヒヤに着せし ^祝祝あり此より我等ハ
諸帆を揃ふ結舟快船を船子引揚次日朝五
時寅時 東は南東の徐ゆ帆を用き此海濱を去
たるは實に因獄を免る事也一心を

我船の歸返を日布と朝鮮に問ふ航す。ハ日布政取
はむ不使なりと見え何れもは通商の奉行の指
揮の器械のめき者ある存通商の甚心を方して我
等も航を其企を支へしと知りし通商の類は日

北海津輕海峡ハ其幅僅日布里三里なり水
中暗礁多し潮汐多しと甚通航に危難多
事状速も我航せん事を止めし事も歎也
又なちより使節に送る事申すも由敷く日布
國領にをりしを戒め且日説る日布總海濱の人
我々今より林製の事を述べ我々今日日本海
濱進通航し難航に危し止を得ずその濱より
よすらるるも及び國林製危し事諭しぬ

吾人情もていふ海上危難は外ハ日清小
を往く者も此と信じた危難も違ふ其濱り
家へも此と信じた道理なき事也又彼等の説取
我等も堅く信じて言ふと言ふは予も彼も
昔々ハ日本北海地事に於ては我等航海最要
とす所也其地方海濱は遠東歐羅巴製此
海島に審し海路所好は未だ我等検査す我等
此物有り依て日本も其針路を知す好意成

得んと欲し^ルかとも是も能き事と云ふは
彼狭き海峡を穿ては許我地方を解つて見得
す^ル事也其地方に在つて事阿^ラと
云ふは日本入^ル事也其の移す^ル所を覺るや
終^ニ黙^リて暗^ニ我意^ハ但^シと^ス也但名^ハ後^ニ
阿蒙院商館の司^トフと^シ者^ヲ我を^視
彼針路を尋^ヒ計^ル故^ヲ我^ハ彼海路の危^ヲ
説^ク阿蒙院人^ハ朝鮮と日本^ノ間^ニ航海^ハ誠^ニ

る所なりと云ふ事ありり予ハ傾固（さるもの程あり）此
航路ハ我ヨリ前ノ時（さ）ヨリセの通航ナレバなり
予ハ彼ノ輩見（き）テ一紙再検査せん事ヲ要スル也

前ノ押印者人此海路ヲ最（と）テ所行（し）て始（は）て此を地誌
ニ載（の）せしを予今度此航路ヲ右を蹤（た）跡（た）し一程彼ノ見送
ル所被（は）り又日本の徳西濱朝鮮海濱の多（お）も並
ニサカリシ北南濱東濱及北西濱止スクリル諸島（諸島）歐
邏（巴）航海者（者）の末（は）と知（し）る所（を）を實路（しん）せん存（ぞん）今（いま）

三笠月を費（つ）し一第七月（しち）月（げつ）に於（お）き予ハ我（わが）船（ふね）カヤツカに
到着（たつ）す（へ）り大（お）板（いた）サカリシ北（きた）南（みな）部（ぶ）ナニワ海（う）濱（は）及（およ）びバチン
七（しち）海（う）濱（は）は予（よ）ハ百（ひゃく）四（し）十（じゅう）三（さん）年（ねん）寛永十三年 所（しよ）業（ぎやう）院（いん）人（にん）の到（たう）りも
可（よ）し其（その）後（のち）も此（こゝ）を航（かう）海（かい）者（者）ありて予（よ）ハ百（ひゃく）年（ねん）以（も）来（らい）
は此（こゝ）を大（お）地（ち）の方（かた）置（お）き多（お）く行（な）りし（し）る所（を）此（こゝ）を地（ち）拾（し）査（さ）
なく（し）此（こゝ）地（ち）方（かた）ハ形（かたち）未（ま）定（てい）多（お）く（し）る所（を）も数（かず）度（た）の航（かう）海（かい）者（者）
に申（ま）て益（えき）富（ふ）を得（え）り（し）是（こゝ）於（お）き予（よ）今（いま）此（こゝ）形（かたち）多（お）く（し）る所（を）日本（にっぽん）に
南（みな）西（せい）と北（きた）西（せい）濱（は）を拾（し）査（さ）し一津（つ）輕（けい）海（かい）峽（せき）の廣（ひろ）さを測（そく）定（てい）

自注但アルスト及ラロウセル地境を尋ね其
度百十里存す然も日本人の望遠鏡十里を不
カフト島を尋ね 自注此島は日本人の伝説に概略を
サカリシ北回し四里なり然も不詳なり 其間より新海
峽を見出キモンシ岬より總て其北西濱を拂うる好
港あり其處に我小舟を送り又韓地とサカリシ地
相別る所を検査し終りデラホウシンの海峡を過て
ツリル諸島地回を巡覧し返るべし但サカリシ地濱に
好港ありを見り我小舟を尋り得べきや不詳に
に注ぐん又日本西海濱の總部と津軽海峡、河

茶院人の日本海濱を航するも日本人より外あり
へ常れハ彼をく探りしめんも可なり又朝鮮海濱
北緯三十二度より四十二度までの巡覧するも難か
且も白人針を以て交易を取結せん事成る然るは
日本より得きし事も彼より得きし事もあらん然
とも唯新中概略の東海濱を搜りたり諸島の南端
を検査せん事實に我俄羅邦人の専務とす所を
くしとす
自注予俄羅邦を去る後小甲比舟の口より
トシ此航海記行書出板す其中に記する所

今度の航海に検査し得る所有り津軽海峡朝鮮海濱岬島の
東側等と尋らるるを記す但岬島の西嶺に我等の特子検査する所之
長峯を以帆より一時^紅去去年此岬より一針北より西
よりして船を出り若るに長崎の岬の岬北頂平坦な
ゆるぐえの港口の標的より第十時中 ^{已時} 我船より北の東
半五度より伊豆島北標的より一樹を以て岬北頂の
長峯の港の係り流るる者より港口の目的よりものなり
船の陸を去と十二里許りして海の深^深三十五尋或三十尋
に到り海底の總てクイと見え四年に船母岬に我より

南の東七半度より其距十八九里許此時天曇南東風
なり予船母岬とくまの岬の間を今再び測量して亦
作らるる道を訂めんと欲す天候暗く雨を催し南
東風烈しく海荒れなり氣色よく今船^望見え一針北見
えぬなりしは其事ハ早す此風より希し臨て早に彼先
五島の岬を索過んと思ふ早に五島の岬を見せり
西嶺深く只一次との山頂を登り而る船はアツセ早に五島
と五島の岬の間を登り彼も是も岬なり是事能くは風烈なる

ぼろろ 船をたまため我等長崎まで如此南東風の幸あり
 北風を幸を験みたまは北風の北あり幸ありと待
 待^たに早て動き北風を制船の速より名を向て天也
 暗き時北風北東より幸し陸を見たり市島あり是は
 日本地なり ^對 船より北風あり ^對 船より北風あり
 四千里餘を離れ北風あり幸あり北東より入るる風と象
 あり ^自 浪の流は此間の間一時強き ^北 東より ^此 陸を
 四十二度より向て船を日本地流あり ^此 陸を
 見たりを幸とて直に船をおき ^夜 中風ハ後ハ

たまとも 濟高きまに行く夜八時 船に ^對 船の南
 端を離ると十二里行半舟の深き底ハ細粉の
 底に泊せり ^{昨日} 見し陸ハ ^對 馬島なり
 一驚しなり ^{三月二} 十日 曉に對するハ船の北あり
 約五時半 ^宣 時 ^中 過 日本領を五千里より二十五里許
 此距より南東より入るは是島あり連りし ^諸 島あり
 や又ハ日本 陸地の濱なりや或ハ又其陸の前ハ在
 別の島ありやを定むべし ^自 浪日本あり ^此 島あり ^此 島あり
 當て是島あり ^置 置 ^其 其 ^大 大 ^島 島

對馬島と 其日北濱ハ亭ノ見所凡十五里許の長
略同トナリ 其北より南に向ひ其中央ハ北緯三十二度 五
二分 經二百三十五度十八分 三十分トナリ

我輩亦五島北東側諸隅を略測量シ其邊ハ此度
ハ其西側を測リ波妙を参考シて此島の経緯度數
を詳ナリ申シ母コル子^{此日記}我輩が所を補ハ
ト欲ヤリ長峯をわし後をへす天氣荒レハ
其企を空クヤリ且日本の南西濱對馬島ト^對

其所ハ彼日に^約其海濱ハをろくと好ま
を破レ以巡覽スヤト思ハレハ是レ天氣西風由
ル由其處を先ニ取

此曉ニ陸を見出セリ時ハ我船ハ對馬島^向ニ朝
時ニ至ル^{辰時}ハ^對馬島の東隅に船ハ向テ我
西ニ彼島を見又東ニ一島あり^{景保地此所} 此ハ
ロウスニト地^{此島}ヲ載ル者^{コル子}トの見^{此島}ヤ^{此島}
彼の處を以テ之を辨ルものなり此日午^西ニ^緯三十二

四度三十分五秒經の海上の時辰儀 然を比例し
三十分とて二百三度十六分五秒に在對するの
北端ハ此時我船より北を見ら其交点を北
南の西半九度半頂平なる一高山あり 景保橋 御岳あり
一時ハ對馬の北端ハ船の西に見たり對馬島は
南北最長三十五里其幅ハ錦子より申能く長し
とも十里或十二里の餘り及ん何者なるは海を
を好距離して一高山を見らるあり其南端ハ北

緯三十四度零二分三秒經二百三度三十分なり
此島北東より一隅を北より南に其後ハ
て此島二川に別れたりと云え其幅ハ一灣を距て
其後の交ハお連接する 自浪見島より北對するを狭
キ瀬戸と云ふ別れて二島
也其西より一岬あり緯三十四度十八分五秒經
二百三十二度三十分十五秒と云ふ此島ハヒダブコ此
岬と名く 景保橋 御岳あり
里島を指すと 此島ハ我船長壽に逗留
き一中の長崎より一とて常ニ我等に對し

自ら寛大の徳官の如くまをり、無理非道に
支配しつゝを容易に思ふ事ありと行し者之
對する北陽日ホル子此洲に傳す由度早分平
妙徑二百五十度三分平妙と守前子云平頂此
高山ハ北陽に遠くは傳す由度三分に阿毛
此島此北部東部ハ南方よりハ山多し、但南に中等
此島山あり其よりハ白點雪の如く雪あり、其ハ
石灰板の自塊を多く、全島總て山を鍾り如く

其間ハ海を隔て相阻るは我等此總島を巡る
とて是とも定めて日本人の初より其谷地ハ稼穡造
とせん又島濱ありハ港灣ありを以て此島由て其
東側と西側の隣地ハ往來交易す此使官あり
を領日本人ハ朝鮮人と文を出さるといふ物
此島由て於ては、其よりありとてなる

長崎より通領此島ハ朝鮮國の一部ハ日本帝
此所領より對する處より之を治めむと

此も此言の如くハ誇張の語にて薩摩藩の琉球を
服従し其國主を付薩摩藩より撰立すといふ
語と因しものありん

羅針の教方の北面を以て對するの東側十二里或十五
里を距し海の深七十五尋ありて底ハ細砂ケイ及
貝殻なりコル子ツト島は形圓き礁なりて周ハ七里
あり甲比丹コルクメントサ諸島地内ニ舉たるホトト
鳥に似たり此島ハ緯三十四度十六分三十分經二百三十四度零

四十分五秒とす此島とヒダブングの岬の距ハ十二三里許に
して岬の東ニ在

此島はアロウスイト此島ニ對する島の北隅の東ニ置り
考ふ甲比丹コル子ツトハ深を磐石峙り對馬島を過り
唯此島北東隅を以て此を北隅と思ふありアロウスイ
ツトの島ハ此北を以て緯を對馬の北隅地緯と同く三
十四度三十三分とす

ラベロウセ 名此島ハ 對馬 北隅 端を三十四度四十分

三千秒等 我等の見所と唯二分を違へり然れ其経
 度は三十九分は差あり是我等は之口ウセ此見し
 ようい多く西に在り故に我等は凌を出帆せし後二
 程して経度の月の距を一千より多し見しコル子
 此時子コロノメニ元を詳に検査し予其緯度の測り
 略しき事なるとも此は此に我等の測り緯度を定
 むき一校あり夫ハ子七百半七年天明七
 年丁未 五月
 亦言西年之口ウセ此見し其船の経百二十七度三十分

對する北陽より西四分許とす此月ボウツン船名を月距を
 下人の測り午正の経度と比例し其中數百半十七度十
 二分把理新地東とす 子リース子ケル本月の距を以て緯
 度を測ることをなして此時子ケルリースイクに測るる
 月距日地測量と比し一ケルリースイクは西二百三十三度三
 十九分とす 此月北陽より北四分を引て乃北陽地緯
 二百三十三度三十分とす 我時圭の測量とは當りに
 僅三分差あり此由て明あるは之口ウセ此記

行中より集る所の時をに差あり。グダレトは其の上
官の不幸。四條よりふ由を其の第廿及第廿九此記の
時を正すことを妨げらるる故に然らざるべしや
此記行の筈三卷ふ又第廿五月廿六日其船の経
百年七度甲子十二年妙地理刻の末とす此日此
午のを測るはホウケン船に在て對する北陽より西
四分とす此我測と唯一分を差す是ハグダレト第廿
九の記に換ふを以て測る所とす我測と大差

如きハ我に於ておとす所あり。ラクレ山キワル
此岬及アニロ岬此岬南端の岬等此測に於てラハロウヤ
此記ハ我測る所もグダレト此経度の測とち小其差
僅少一是我星王ナリ西非ナリ西官ホル子ルと云とす。強するは
一とす由てラハロウヤ。グマニラよりカレサツカに
到るやそ測量する。所終りて凡一度の経度差を
見てもグダレトの校正は信ず時ハ相合するなり
而此校正の法を用てノト岬及サカリ此西側を測

量よりサカリンは長さ五千里或ハ六千里と云
 ラベロウセの勤馬の記は廿五日夕日入る後子未は北
 より東差南東子見えたる地故日本此濱と云へ
 里より一里あり是對馬の南都より外あり
 波長多ク七時酒時より初更五時定時まで小船を
 東差北東平七里を走る
自注此勤馬の
長と短相均し又其
 針路を北差東子持す
自注此勤馬の
早四倍よりと云セ好
 者
自注此勤馬の
地急を作する人あり謂く此等五月廿五日廿六日

にはべロウセの見える地ハ一対馬島なりと云
 其地の限を對馬の南地陽をとり予考にラベロウセ
 此を勤馬と思はさうと云然るは歐羅巴人
 子未の見える島あり是を置を黙止まへきに非
 是然るもラベロウセりかく其の遠はるその理あり何
 者此の舊記は勤馬島を日本濱と云く正
 是此の由り彼を東子見し地を故島と日本濱と
 近き所別の一島なり勤馬島を日本濱と云ふ

此對馬の國より日本地屬島とすも亦也之口ウセ
此考子日本濱と朝鮮濱との間を四十五里の間
とす我等此を見ざる日本濱と對する島の間凡
二十里或三十里ありと見ざる此より由て算ずるに
日本と朝鮮の間凡七十五里を隔つたり但我等
の見ざるの日本濱とするもの臺岐島なる日本と
朝鮮の間に此より遙く隔るる言ふ可し

對馬島を離れて順風に乗じて船を北差東に進め

二十二日^{三月廿三日} 戊午又日本濱を東差南東に見る
アウロウスと此島は後六猶百五千里を隔てる上
空最之を明し見と能くす是より於て風は逆て
船を備り其地方よりすらすら晝夜五時^{申時}に其地
を離るる九里十里の間にして其海百尋より深
はるに諸其地の北端は最なる岬と其中央は低き
所を船の末に見え又東差南東は深き灣ありて
其濱は南西より其地は亦深き湾ありて其山は二つの岩

鄰島三瓶
山八也や
あり石見
此語多む
事八山臨
奇款詳す

あり其最上峰ハ圓錐状す我より南の東十六度
に在る低き一峰ハ我より南に是る此二山嶺ハ深く
陸に在る南西より北東に亘り海湾より二十里と奥
に在るといふ景保按出雲の之瓶山と我等其岬地より離
れ事十里と過す然るも今全く晴朗なるは南の
方ハ猶暑なりと北方ハ山嶺連りて深く陸地ハ
今より見ゆるは是れ此地ハ陸地と云ふ
一島ありんが但臨岐島ハ昔は是よりも大なりと云ふ

に今見ゆ所の長北東より南西に向て十里許也

此より象峯ハ名厩家バセハシサタ此洲ハ後山北緯
三十五度二十九分二十秒経西度二百二十七度四十分と
其海湾の中央ハ北緯三十五度三十分と南其海湾
ハは陸地と此島の間の瀬戸より来る多めの舟何れを
見ると蓋其土人歐邏巴船の此に近き来るを云
て驚て其山の官目ト告さる者多けん其岬地^地の南
端より離れて小舟何れ其海湾に碇置るあり

天氣清朗なるに明き其地を以て見たり
 也此後申船を少時^をとめ吃みぬて其地を去る北東
 に見たり船をそ地に向てより風順なるに南東
 差東より進む八時時に南の東十八度^を吹^りて地を
 へりともお勞多し暗くして明きること能くす
 とも海に從ふて船を北^をとめ八多りの土地を見出せ
 とも刻くとも海濱に於て言ふと又低き地を見
 一國を著しとある一の從舟より言ふ^{緯二十五度の}
 緯二百二十七度

〇九^〇 〇九^〇 を去るに我船の末術に當りて見えたり其の
 見し地の北端に我北の東八十度^を在り六時^時
 は全見たり所ありとも北端に緯^緯六十度^度十四分
 緯二百十七度十分あり六時^時其地我より南東
 差東の積東より當りて是言此時風順なるに船を
 北及北東より進むと能く其^地の海を數て測量し
 總て百^里ありて處より見たり
 後の航海者等此言を詳し驗査せんもハ隱岐島の事

置を授の志一、予今度見たる所、陸接察する前に
して、前より見る海濱の北、好地を臨岐とすも、固
其島の固一、より、甚小好る、不接も、又、北、北緯
三十二度、三十三度、早、あ、北、固、見、地は
日本地の一、好り、や、又、^北、日、三十二度、日、分、と、三十二
度、三十三度、北、固、見、一、地、を、臨、岐、島、なり、や、但
日本舊圖に、載、る、臨、岐、島、^四、の、小、島、なり、也、詳、解、
は、

予、此、接、察、を、決、す、能、く、さ、る、前、より、如、く、接、察
あり、て、近、く、日本、濱、に、寄、り、と、能、く、行、く、に、固、也
此、三十二度、と、三十三度、の間、より、一、地、も、猶、臨、百
五、里、を、離、れ、且、此、兩、日、の間、殊、に、天、氣、宜
し、^見、^カ、
此、^見、^カ、地、日本、北、陸、地、の一、なり、也、臨、岐、島、好、り、也
志、を、接、察、早、學、例、を、察、し、日本、西、濱、三十二度、の、石
は、接、り、^見、^カ、の、地、^見、^カ、を、已、に、三、百、年、來、志、を、所、好、也、也

予之を雷をけりてアロウスとの島に於て此島の寛出
しる百里及び此等ある度の間の海を夫と隨て狭く
高きなり

諸我針物を北東よりとりしは此見し地之を予が取ぬ
風を以て北東風あり四月廿六日我二月廿七日船北緯三
十七度四十分の西緯二百二十一度二十分在清朗
地着りて風もなく波平ありて二日の羅盤を以
て其差を驗し一は二度九分甲秒と三度甲分廿

秒とを得る其中數二度五分は北西差なり予
日本海に航するは始終羅盤の差北東一度或二
度と北西一度或二度の差より如何を見出すべ
からせの羅盤の差も^亦亦尠く微也又緯二十九度二
十分は二百二十四度甲分の地を於て八波を我も
定數分の西差と見る已彼我を符合するハ偶然
と云ふも總て北緯三十四度より五十五度の緯度間
^石差の差甚微なりと云

多向月二十七日 我三月廿八日 托夕律二十日度二十分程二
百字六度十五分此度は於て潮水の最鹹なを候
と云此度數々甚深さを測りふ百尋まで底り
列らす風強く海は波好とも船の行は毎二コイ
ブなり 托ハ心角きりなりき 船の行を徐りて
托のきりりりハ是唯潮流のまけき 以因之天曇
雨を催きすてんえととも天氣儀ハ二十分程
もして海荒の候と思さる 此より由て予 船口 手 船

う歌中、事如く次日ハ美静なりき、ラベロウセも此
経緯の度より天氣儀の同一度を思さる、この如くも
天氣儀も変なり、とつて蓋も天氣儀の如く降り
此地方は於て常くならん、とてホーレン岬の如く強か
ラベロウセも亦も 偶々此地方も同一事を見ざる
然るに驗考も亦も事なり、亦後、予ハホーワカ海及
スリル諸島進所、とも、この天氣儀の降もを
見たり、又此ハ長崎を出帆、一日ハ、お碧深く、雨強

く風暴しく天気候二千九百五十分子降て午後
五時一七自北間續きしに好まぬとあつても暴風雨
地起るとなす却る好天気なりき

前云く日本西濱を^探査せん二千九度より始り
志む入ると思ふも何れも好まず取らざるもなす又
津軽海峡より我船より南とす也又北とすもやも
信るをたすは筈四月三日船行二千九度二千二
十社なるを序之ををめて二千九度の子午想を

め此日潮流の南西なる故に船を平しく東に向ふ
船の三千九度四十分子存し到て北東に當りて地方を
望見しり筈五月一日船九時より東差北東十八里の
二千里より^新島とす地を見し全島の如く平島と見
津軽岬とサカタ湾の間なるト一とありと守然と見
之を^新島はそは地と見し其島と見し其島の
中央なる山々の最なる^新島と見し其島の
周囲三千五里許北緯三千九度五分〇〇西経

二百二十度十六分とす 彼等峯の其岬の
中央に在り 兩側の地陸連一線其南端を
三千九度四十分其北東端の四度〇〇とす
予此岬を名て 魯西亞岬
リエセンホルムゲルゲテとす 岬北
南側ハ山嶺相連して 一行に差出て古の如く
其嶺ハ礁山巖突起 其内陸をく二大礁あり
此地其岬の北ハ大湾あり南より東より地低く
島の如く之由是故前日の我等此を見ても島なりと

必ひし其北の海湾小船をきりて其後地を連
て陸地を知らず其後狭き瀬戸を陸地と別き有る
我船の此岬に近く寄る時ハ潮流甚疾して其緯度を
測りし諸角隅を測りて比較し其濱涯の島を始
と能く其時毎に緯度を測りて詳におは考やうは
程度ハ時規の曲りてを定め緯度は此二分は差
何れをも緯度の測り妨何れもふりて入る如く此の
潮の疾も其濱涯を測りて障ありと 然るに此を

此地の緯度を定むべきは方角を定め船を乗過
らざる其濱渚に船を下りて之を定むる也

又五月一日晝後二時其地よりとくとも里許を海の深
七千尋あり此岬の西側より一の深布と又北側より一湾
此船を泊すき阿多をえり渚に泊りて数多の日本船の
行をみる然る我等其地より土人をえりて向て西を
より航し魚島西岬の南流をよりて能く此地をより
物より其地は全南向なりとある此日朝夕に磁石の針を驗

する小中船を泊りて。四三口の差とあり

次日天気晴朗なりは我等舟中海濱を驗査し
津輕海峡を尋るに宜しきなり渚に泊りて
船を乗し波岬の北端より一島の礁相連り其地
甚るしく傾きなり一湾を形制す我等舟中此湾の入
口をえりて向て一然る津輕海峡をよりて此島
阿多嶺其湾口あり所を船をよりて之を披るに
然るに陸地續きし殊に其嶺相連り北より南より

港より約四時漣涯を離るる四里許海深五里許
一々て底ハケレイと小石多きをいふ此は北緯四度
五十分西經二百十九度五十分より一港阿多此小府をいふ
港内は数多丸船を泊せり其街市阿多峡間ハ田畠
に樹林多敷茂り土力の優よりハ人工の勤なるを此地
方此美とするを感ぬ其濱ハ總て砂すて暑熱の爲
に行人を苦すむ居るといふ也又一何れ阿多此王
船の錨をいふ此船の向ふ所の針波ハ蓋多船す我

よりをく此を二回して此港ハ入るとする者ある船ハ陸
を離るる三里許すて海深五里許底ハ堅まケレイ
に砂の夾りしるし阿多云小府此外ハ濱に並て家居
あり漁者此種変とんえんう船の周に多くの絲織船
の阿多をいふ峡間よりいふは金堂は掩言山嶺阿多
此の向ふては阿多をいふ屋敷二時ハ船の北に書てんり
其後ハ於てはもたや陸代をいふ更ハ清輕岬と
思ふべきものあり此日ハ最清朗すして月鉅を例て

緯度を校正すうまに宣一なるもの六通の測量を始して
その中数を西経二百千度〇〇と一八八號の時規
二百千度十二分四十分より乃實經二百千度十一
分十五秒船の算より從て二百十九度五分二分也

是より南東航る彼小舟より船向艘をわし速に
船より來り來る何れ其之般毎に二十五人〇三十八
何れと之も是れ我船に敵せんとするも其の測
へはつしはなすも船の砲より又コロート 鐵屑 の類 をたぬ

三七 船吏より命令を命しつ然るに六時より其船
より我船を引離せしむ故に我等より日本船より彼
を呼呼されし彼は関入さししとも彼等我船の
周を二回乗廻して我船をえりその後彼府より返
りしるは是れ地有目我船の千海濱にをりて
彼船を出して之をえりめ且は歐邏巴船の此より近き
來るを怪し我船の人より如何に様子などを伺めり
ものありし此船は長崎及び日本北濱よりくる船と

吳子てき漕撰全歐選巴船の法を擧を船の
兩例にて其勅す仕方子非りし是故に我等或
此を船解地方北海賊船を預んやと擧えを

我等カムサツカに馬きし時日本に在るを法
きしは志云日本西濱の小舟の津輕海峽小を
如きしを海賊の住る所我人等前小舟
ハ如くその所より口艘の船ハ其賊船を彼等我船
此尺列ぬ大船行を以て馬きて子をわきたり

返りし事なるも

日の南小入時我人陸より三百里の離を以て濱に濱
漕を屋より雪を掩へる山嶺その地の北よりして此
より依き地方小山にお通り府のをきた好峽地
所より隔て南に志山あり其景色好なり也此夜
清朗にして風劇なる夜中船をまきし行之日の
曉^昏く帆を張船を濱の北半西より向の昨日
又さる山嶺の連りしを以て乗過られ中等なり

高き平地の西に差出たる島岬岬の如く島の如く、
見ゆる所あり然るも其地をなまらまはゆる陸地
に續きしむ出先あり此岬ハ其中央北緯四十
度二十分西經二百二十度十分三十分
とす予我友ゲ子ラール館ガムレイの名を取てガマ
レイ岬と名く此岬ハ此海濱に著しと始め北東次
に東差北東の方向に見ゆり少く船をなめ
津輕海峡の口をくるとす此岬一言嶺島館狀

予て頂上雪ありを見予此を我船の理學士の名
に傳てしレニユス峯と名く北緯四十分西經
二百十九度四分とあり此嶺の東側には
津輕海峡の口ありと見ゆり予東に續き
北に一言地ありて差出たる一大湾あり其岬地甚変
北北端より船をえりて見ゆは此湾に通行せし
まにあり 欠 五十分其地我船に在て
三日里試難と云ふに於て詳に此岬を測り北北

十度九分十五秒西二百十九度五分十分とす此を
壳元黄色の礁塊の集り成る岬として雪を掩へ
る嶽より此を連り来り即此をグレイン岬と名く
此ケレイグ岬より濱を従て北東向より又一岬有り
夫より終り全舟を向ふ此は北差北西より多々の雪
山をえ東より向て差出さる此より由て我等志すは
此を蝦夷一名松前と属す地として此を
津軽海峡の口と名を置きあると日本地の岬を境

此全舟を向ふ津軽岬とす其北より遠て蝦夷地
に在岬を我船より取てナデスタ岬と名く此島の南
濱も~~北~~東方に向ふ是れ此兩岬は津軽海峡の西口
を成す津軽岬は緯四十一度十二分三十分秒経二
百十九度四十分ナデスタ岬は緯四十一度二十分
十秒経二百十九度五十分三十分とす此より由て此
海峡の闊僅九里あり然る地志は其潤を百
十里とすナデスタ岬の南より多く礁あり波濤之

一觸るを劇しとす

津軽海峡の潤を甚廣く謂ふはラペロウセが何處
池人地島に帯る甲比母テフリースの事よ也。そふ
又舊島に在り此海峡の潤を多くいふ事なくやうたふ
ハレケウツセルの日本島に在り十五里と一島西進人の
叢叢とす。拂部島人は千里とす。是子七百
ハ十七年天明七年ホンソイモノリの兄前あり。此はソイモノ
アカラセニコウフ此説は後ふゆ。彼此をニナウエル

ステン魚の島と云ふ。然るも甲比冊ボウフオン地前已に
ビユアセ此海峡を例る有り。ラペロウセの記は別なり
此等より百十里の潤を非と征す。アロウストの
西西進島より北狭く之を記す。ボウフオンは津
軽岬とナテスダ岬の間と十六里と一我等ハ年
九里とす。ボウフオン地島は又大島マシマと小島コシマと
合見失えり。

千八百零二年享和二年ペテルスビエルクあり。魯西進人の叢

明より北洋島嶼ハニエクレレンヲ因テ鑿行セリ此
新島ハ從來歐近巴航海名唯僅ニ黙記セリ日本
西濱也。頗洋者其島中ニ船隻とサカリンの間に
カラフト一名ニスカ行島故記す船隻の西濱も島
も此日本國島ヲ載テ其所屬トす此島ハ千七百半
二年天明二年女帝カ多ナ此世ヲキスマニ由テ日本
に送り返シテ日本人幸太丈コレ所持セリ事ありテ
今度此カラフト島故検査セんと欲して津軽海峡

を通行セリに唯其西峡岬を測り夫より船隻の西濱
を巡覽し彼カラフトと船隻の間を通りてホーソカ海
ト云ふんと云ふ也

津軽海峡西より西分度之南に大島小島の二島を見出
ぬ此二島の弦津津軽海峡トお對對在此も幸太丈の島ヲ載
し此子由て我等彼カラフト島ハ船隻の北に在り
を記す

晝後四時ノ船中ニ津軽海峡の中央ニ對する島子有

二百十九度五分十分と云々甚弱り隆潮は舟を船を
津軽岬の東に舟を流さし後北風吹きて船を地方
より離れ行しむ

蝦夷島の南濱は日本北南濱と存全く替り松前府
北をより日本地方より一舟を國田田畠とす
又日本地の北端は蝦夷地の如く又蝦夷島を南
より北に連る雪嶺は両島を隔りし日本地
北北をより此と同一向竹山嶺を連るは五月二日に

見方峽間の小府ありし外は甚地合蝦夷地北に
枯渇は元日本人の楢橋は初年より其
地は存切ありしと云々此より之を認る蝦夷地
は連りしと云々地震を裂くお離れしと云々
亞の拂郎奈より離れしと云々
色 齊西利亞の意志里亞より離れしと云々
誤り同一船は日本と蝦夷の河僅に海峡を別
す西地の濱は同一礁巖岬峙し兩方岬倚の

勢に在比し之同物を割るや一兩北山脈の御もお
同しく峰狭き瀬戸を相隔のこ彼言まきケレシエス
峯ハ既焼終りし山々甚を空すは猶大山何れと思
^れる如くハ此等大山の如き地下北古まて此等の地を裂
しをん今も日本北部の地は地震多しと此津
程峽ヲ航する人其地方此形状産物を観る予
々考ふ所の宜仁をととふん
第五月廿日曉風西差北西とあり船を北に進め大島と

小島の間ヲ入大島の西ニ里許まで海深百十尋まで
底ノ及まぬ此兩島ハ燒屋なる山の如きを為す礁か
他ノ所ハ大島ハ緯度三十一度三十分三十分秒經二百
二十度四十分四十五秒なり狀急く周六里許なりドク
トルナレシユスニ此山側西ニ蛇行狀本 ^マハ是僅
數年前ニ叢始なり ^微微なりと具頂より現す烟の
升るや又さう小島ハ緯度三十一度三十分三十分秒經
二百二十度十四分〇〇秒一形隋土圓周十里許あり

其北端より一高嶺の海小定出する有
此兩島北西と南東と對峙する間の瀬戸二十里北洞
阿り津波峽の西口は從令天氣日曇ることも此を
見送るべきは南より来る船あり尤先ナレニエス峯柱
此より後舟へ其頂常に雪を掩ふを月送るにケイク岬
より津輕岬まで其濱凡里北東北に向ふを著るす
^著北より来る船は大島小島を標とし^亦ナレニエス峯と
ケイク岬も同時に是より此兩島の間に航するを

各種の島ありて海峡の中より對峙する在るの時
は海潮の急を用て潮の漲強はるの船愈々狭く向ふ
来るべし一船の南西濱松前府及ナデクク岬は
我馬する所トクトルナレニエスの殊詳は西より西に
畫之れ一島をらん即魯西亞人叢明の島トコロシ
ルと名くる所也

此島はシケウセルの島にクビテマと名く蓋是は
日中人の名くる所とすナユセルは船乗り人アイ

此名く三前あぐん 船身島近邊の地名下みしりを所
まら者多くし五しりりリヲニリクナニリ 島の如し
此島も原名ヲコシリといふへまねるむ

此島の北東より又高岬有り其地をヲタニサワと名く島の
の長十里幅五里を中央緯四十二度。九分経二百
二十^度及三十分とす此島ハ人居がしと見え全く樹木
生盤りて此端より彼端ニ満ち此島の北東端より
離れて一鏈り星礁突起し一帯一箇小島此如し

此島為子ヲコシル島とヲタニサワ岬の間ニ通航す少危
あり候とす

甲比丹 フロウトン 此を通航すに難あり

又此島の南端より北東端より柱礁あり及島の西側
ハ礁岩を以て満ちまを

ヲタニサワ岬 緯四十二度十八分十秒 経二百二十度
十四分より七子岬北西八度より南東四十度 隔
てり此岬西風動く也船はヲコシル島の南側を

曰く蝦夷島北北濱よりよく能く見ゆる然るも天氣清朗
好きは其濱涯を望見し其陸は渾く在雪山の側
濱は海濱長岸も似く唯一並に平等なり是も
夕よりあつてヲコシル島も見ゆありぬ五日の曉より
ヲタニサワの北を東より過て一の差ある崎を以て此岬
こそ東より入る一湾をなす北北側は好港と云ふ可
西側はシユビキ岬とて魯西人最明の島と云ふ
もの之前云湾地の北は大洋南東より二十里許東

何れ此^西湾より中間の地の島の形を^本とて半島と云ふ也
日本の北西は在魯西岬と云くるなり但し其岬を
北より南に向十五里の長何れ其申共より山嶺を置
り勅勞をなれ船將キユ子ユルノ地を以て名く
此山嶺北緯四十二度三十八分西経二百十九度五十九
分とて此岬の北は大洋は子クルニクテ此北を
以て名く此北陽は差出る岬を其土人ライラン岬と
名く緯四十二度五十七分経二百十九度四十四分なり

北より南ニ至リ長五里有りシユクテレン湾の闊西岬
北同十六里有也

此日天氣晴朗有りて前より沈湾長壽を乗過てチ
シ岬の北より又一岬原名ヲカシエイ有るを見此より一
湾有り其のシユクテン湾キエテユツフ湾より北有りと
是ヲカシエイ岬の地ハ始ハ北差北東より向夫より北東ニ移
リ終ニ東端と有りて又別岬ヲカシエ岬と名く此西
岬間の湾ハ我等見及むすヲカシエ岬より其地南東

より北より北差北東より多山の地有りて東より向る
何れを東より海へ入る方を橋上より望むと天氣晴て
遠く眺望すも小島地何れとも見え自然此岬ハカラフト
と船身の相別つ通海好しと云ふ是亦針路也東
差南東より取テヲカシエ岬の東より北西の風より船を止め
夕前には我志^{志所}所の建造を見下と計しに畫す
風止むるべく夕日及び船ハ北緯四三度二分三十七
秒西経二百十九度二分一分。小在船より七八里を去

東の方より低き崎地を有る海は百二十尋ありて底は深き
ヲカミナイ岬タカシ岬及其間は一岬もたまたま山の地ありて
二十里許り海は是れ南北十六里より過く此間一深湾あり
里を始り著すとす岬をへテルスヒルグ北字館の首座の
名を以てノウラシルソフ岬と名くヲカミナイ岬は此南端
より緯四十三度十分〇〇経二百十九度四十分〇〇あり
其中央の岬は緯四十二度十分三十分秒経二百十九度
三十分三十分秒よりタカシ岬は南端の南端を我

通船せんと欲する所緯四十二度十分十五秒経二
百十九度二十九分〇〇あり此諸岬の端は皆礁を以
て圍む船中一箇船形の言礁タカシ岬を標として著すとす
此海湾の北東濱も南西濱も盡く雪にお連りこれれ
も山は中等の島本生し一河り深く陸に入りまゝ山頂
は總て雪に掩はるるあり但海濱よりなき低山は雪
解き有り此地方往者多し其地も先づ我嘗て
此より人迹を見ぬはタカシ岬より近き低き地ありに

烟の立升と教はなかく火光河を見らる也此海
湾の北深岬をぐる高山の林あり一尖峰甚高
かたつとも此海湾北標をたに置一此北緯四十三
度四十分。西経二百十八度二分。とす此はよく
又一つの低き河湾の南側は西岸あり其間には湾を
ゆるぎ一崎ハ緯四十三度。九分経二百十九度十五分
十秒とす此ハ凹凸を圍りて此をさき山と谷を
別ハ第二崎ハ緯四十三度。七分三十秒経二百十八度

五十分。とす其形亦と同一
河ハ北に南末をた海湾ハ深く今ハ船をまきり
行へし予ハ此ハ通船をた路ありと思ひ備敷海
を測るは百六十とすし一處ハ此は此ハ圍多くの
山の尾小虎より一峰甚頂の平なり也南差南東より
見多此峰を星學士リエモッフスキー此名をきて名く
其緯四十二度五十分十五秒経二百十八度四十分三
十秒とす又同一湾側ハ圓錐状の一山あり又其北ハ

一山、烟の升るあり

五月七日南西の徐風を深く海湾の内に入り終る海
北流百尋より漸く減し朝八時より天氣晴朗
て之を尋じ其地南東より向て次第にお寄つてその交
に少く北間河の北をたると見え此を我此を進行せん
の程ハ倉々集まると船を南東よりめぐるは
其地終り平らして相接着せむを家より海流今ハ午
五尋より一層ハ灰色の細砂なりとの味の鹹あり

海水北流より輕し蓋此湾の終ハ一大河の流ある
あり也且此より樹木の枝多く浮流て船よりある
河より此の仙河をえて第十時半に船を北より少く
湾北北端より岬河より此を伊勢把馬の不幸北
船七マシス北名を名く北緯四十度四十分十五
秒西経二百二十分八度四十分三十分と云ふ此湾は
通行す此より命なく三日を費も此湾を廻るをれハ
晦日及て此天湾ハ北西と南東より十里の流ありと云

ヲシルノツ岬とマレスビナ岬と北東差東と南西差西あり
在て其間四十里あり我々館の峯の峯の名を以て
ストロゴツツ湾と名く

日の内は此海湾を出んとすり小舟務かき風止し帆ありて
徐風出たり左船を北西にありて是は潮の流より
船を海湾の北東測り流を以て因て八日北境に船を
再地方よりありてマレスビナ岬の後は高山の阿と又其
濱のまじ北に連りてあり此より由りマレスビナ岬より

一大湾を以て其北端は緯四十四度二十五分経二百
十八度二十八分とす此船將シキスコッフの名を以
てシキスコッフ岬と名く其地は今もそらん前の船を
地方よりも低く總て雪を彼の巖礁を滿此湾は僅
一帯の月小なる言き山は低き崎地を添あり此山緯
四十四度。経二百十八度。五分とすパラスの名を以
て名く

此岬十時よりシキスコッフ岬の西に二島を以て是魯西西人

昔明島子記する一はテウリンと名く北東二十五度一は
ヤニクセリと名く北東十度一は名をニ島ナリ今ニ島
長共一四里許幅ハ其半何也ニケッセリ島の東側ハ低
く西側ハ高く其南側ハ一礁突起又東側の礁ニ大
に甚しく濤子打島^南島上ニ少く樹木アリ但東側
ニ存全く樹木も亦一島の置殆末と西ニ對一テリ
島の緯四十四度二十七分四十五秒経二百十八度四十二
分十五秒セニケッセク島の緯四十四度二十一分四十五

秒経二百十八度三十七分四十五秒一ニキスコッフ岬
より十里を離る

南西の勁風ヲ以テ此ニ島也乗廻一モ後船を南東ニ進
めりる天氣暗く必船を以て遠く眺望する能はず
是故一渡支船を地方ニをく寄せり一島ハ夕八時此地
方ニ離る一三里ニ過寸海岸ニ十八尋ニ有テ底ハ細砂也
濱ハ低一沙^河ニ陸小流ニ有山阿ニ有る此地ハ
北より南差東一里ハ其間ニ通行可^き濃戸有

と見えは但北東差東より南て **源** 口の河を以て船を
此の向をくふ又之を以て夫を以て其夜中一 次日船を
少きう此地方を離るるを之を詳言さんと欲するに
其船は約十一のりは其地を以て之を詳言さんと欲するに
と其地を **近** 近く至るは其通りの船は何
ハ前日之を以て之を以て此の由て船を南東を以て
小舟よりレキエマフ 押並にコレは岬の濱を以て此舟は北西
差西より南て一 高山の雪を以て掩るる岬 此山は必一 高

よま在(き)とある所の之を拾査せられは是レハロウセ地
ランカレ峯と名(づ)けり是レ舟に於て船を西南より轉て
此の向に航す此の濱と此の峯は同し遠うたる也

ラロウセ地ランカレ峯ハ阿蒙陀人 之を以てベルグと名け
し **あ** のなる所

予此航海に航すときカラフト北回を通ると欲し之を用て
カラフト島に在(き)る所を推考し 航すの濱と同し
子午線北差西より船を進め是は航す島の北端

を我より北半西半南して三四星の羅子尼都(と)り
海能へす二十五年より二十七年北海を度(と)り
十日曉船を北半向濱小沼之里許北羅(と)り
先ふとならん(と)す 諸日(と)す人の地(と)り八元(と)り
と(と)り我等(と)り北半考(と)り公(と)りは 彼島(と)り 船(と)り
してサカリン(と)り 小島の如く馬(と)りカラフト北北(と)り列(と)りに
島(と)り此(と)り由(と)りて馬(と)り此(と)り瀬戸(と)りの通(と)りを(と)り
た(と)りく(と)りふ(と)りす(と)りる(と)りなり

歌遊巴人島 アンヒレ ロルツ 及其他人もサカリンを小島
として馬(と)りす

船(と)り島(と)りの北(と)り地(と)り 南(と)りの方(と)りに居(と)り其(と)り地(と)り海(と)り
不(と)り雪(と)り山(と)り何(と)りて(と)り南(と)り半(と)り一(と)り号(と)り其(と)り地(と)りの樹(と)り木(と)りも(と)り土(と)り地(と)りも(と)り人(と)り居(と)りす
り(と)りも(と)り山(と)り何(と)りて(と)り南(と)り半(と)り一(と)り号(と)り其(と)り地(と)りの樹(と)り木(と)りも(と)り土(と)り地(と)りも(と)り人(と)り居(と)りす
其(と)り地(と)り方(と)りは(と)り著(と)りま(と)り目(と)り不(と)り留(と)りる(と)りけ(と)りく(と)り 船(と)り島(と)りの南(と)り濱(と)りの如(と)り雲
の(と)りき(と)り雪(と)り山(と)り何(と)りて(と)り南(と)り半(と)り一(と)り号(と)り其(と)り地(と)りの樹(と)り木(と)りも(と)り土(と)り地(と)りも(と)り人(と)り居(と)りす
准(と)りす(と)り人(と)りか(と)りま(と)りす(と)り唯(と)り徳(と)り戸(と)りへ(と)りり(と)りる(と)りん(と)りる(と)りる(と)り

朝七時子ラシダシ岸北在島を船の西十二里許の距ヨス島
アコウク唯一次甚山の林を越えりる島船身島の北端
を^サ割は狭き山先の北西より其端まで一行の
井連了る島此岸地は低くして海は是れ如くする強
一里ありて夜中の船の爲に甚危と思ふ此島を
此より北よりともや地方をぐる船は必船身の
強よりラベコウセ海峡の南端より海峡を渡り但此
列の海峡何よりともい彼長き崎地を乗過て

東瓦南東より甚濱に流れて礁地を求め是ハ此島の
中より^世はあつたさ地方ぬは斬く船を留め程之を
探索し終考し傷むを欲して之第十時子到て一
大湾の北方に倉か開きを足す其南に控て小湾
を控て甚地を控す小島一者此は先此島を控下
一ぬ水深十尋ありて底は細砂とケレイなり此船身
島の北端及至海灣も其より今北レイキスカニセル^官カラ
フ^名ニコライロコンリッフ此名を以てロコンリッフ押及湾と

福す我船北西六十八度より湾北東隅ハ土人のソロ
と名く前より我より北東半度ニ在霧深して此ノ對岸
サカシ北濱をえす又此ハランゲル峯北在北外島
也もえり事能をん

東使日本紀行

第十五篇 船身北隅及アニワ湾北泊

前子云一里許の長き崎を乗過^過んとす前島人一艘
北小舟子乗て我船に漕寄り其ノ小半時許と船
の側ニ添りし我船子乗所を以て一ノ
物系船を以て湾ノ破岸と直子島人多ク訪来

憚りなく船登を乗る我等日對て跪き両手を頭
上へ阿多てそを彼の歌より體に浴び換さず川原
休きなり予彼等より少の品を與へれを甚と
ふ換りなり又へスロイト花餅と大酒とを少く大酒
一種ハ彼より用列すといえり是彼如此精氣強き飲料
を飲をハ多て忘るはと見えり暫して彼等小舟
に鯨魚ナリを載來り船を送りし甚新鮮を畫
時我船の上より之を用ふ畫後二時船中諸士等

と小陸より予見五月半より此處より北地方
に互あり春色の少き實に驚くに堪はず諸處於此
雪に揮舞木に初葉芽れく唯浦公英酸摸れ
外に緑草葉も此後之七値を過え我等カムツカに
到りる時ハ彼地の春色ハ著しといえり是は此時分
彼地ハ此よりハ春を俾りけり甲比母キング北張
後五月北半に彼地をハ野蒜
船吏等之を承り但魯西空の國アルカダは此

より十八度も北なる地より第四月より於て此地の如く草は
茂りてもあかりしと 子テレンは 地より食ねと念ともあかき
カムサツカ人 ブラント子テレンと云ふ物有り 林草は
城より四月八月より之を列ねて林中の日後より之を掛け其の中より之を林の如く作
る之を彼来を製して 徳様の用より之を以て魚網を製す コークの記行書
多しこの八十
一葉よりなる 我等ハ六月月間因の如く有りし 故より此地より道
途一應んと云ひしより此土地よりハ其層ハ宜しく 成ぬ
此層僅敷此同砂石の處歩み易き此之を更より外
ハ涯濕強雪此推或枯葭の 叢 叢を消遣す可き所あり 借
演定より昨の懸念を送り来りし 島人より送し 故より彼は其家に

導き 行と信たれハ彼妹く之を領事 導 守き 故より丁寧に
直接せし我等よりも其家等よりハ 此品物を云ふ所へ
夕七時より船より返りぬ 次日 諸士等ハ再陸よりより 乃ち予ハ前
船より来り 乃ち日本人の再船より来り 船は是は陸よりより之
を待居しと云

十一日晝九時より日本人等一黨北見役人を伴来り 此人の此地
の所なりと云へて 吾人等之を敬へ 且此者ハ我船の此より来を敬
きしより 故より 我等より 速に此處を如帆を下と告て云

我船が末を相前と志す時、相前より一大艦を出して
来りてお拂ふべきなりと之をいふ其詞数々ホユホユといふ
詞を用ひ且一口氣を強く劇て以て諭し、その蓋銃炮で
お拂ふる人を怖と志あるものと見え、そのお拂滑槍
めき、その体我等笑と忍と能はざるし、む是より於ては彼は
逆を以て彼ら志を女ん為す、彼よりして天氣晴く真す、其を
出帆をへし、二三日は彼救く、其事を約して漸く安堵
や、様子に、他の話に移る、此れ使節の日本詞を

習えりふして、此等の地理を彼に問探り、彼の語して
カラフト此名は日本人此名は島の名を志す、カラフトカ及
ヲホーッカ此方置を擧げしより由て予、彼の地理ヲ習へる者、成
かと思ふ、次に能彼を、或るふ是はラキスマン、の言を、聞究え
たり、して彼自らその地の方置を、研究せり、お難くを志り
然も、此者久此地方に在り、略此等の方置を通り、且日本領
の、~~北~~鄰の地なれば、長寄りの如く、我等の地形を、伝を、傳
らざると見へし、彼云カラフト島、此より海上十八里を隔

の彼又云カラフトの北を挟き瀬戸を以て別る地何れ其
土人此をサンガンと名く又云カラフト島は蝦夷島の東北
大なり其島の南北方日本國の官國之を守ると委ま
之を志ると又我船は有本の日本人作の島を出り此
島の濠は日本の會所有自阿る而を差示し其前には
以前吳邦北船の通りき一極を云彼又云蝦夷の北東
はクナジリニコタンウルブエトロフの四島ありて日本國の一
をとすと此諸島の已ハズバンベルグ人以來知る而小

志て魯西亞人製長の地島ふ之を載也

クナシリニコタンエトロフは子七百九十二年 寛政四 ラキスマン 年壬子

子八百零六年及子八百零七年 文化三 キーレストフ 年巳年

及タイトフは由て詳し之を知らず所無也

彼又蝦夷島北諸岬諸川の名を示すを以て予此を我
製長する島中より記す其説所る名多し我所持する日本人
志と必合するを以て予その説の信すべきを志す彼ら居る
此地はクシヤムと名くも但此名を以て總て蝦夷島の北部

を呼ぶや唯此北岬此を呼ぶやを明する事なりし
そ南北地方をリウヤと名けラシク此在島成リイ
シリ北なる島を ^{レブンシリ} レブンシリ と名くとけりまゝエゾ
と云ヲクエゾと云ねあといふの 説を彼子問ふ所の
諸島北本原土人我輩ヲクリールと云又 ^{ハイリク} 多毛丸
リールと名くら者ハ彼らのかうアイノと名け今ハ松本
島の一西部ノトサムボトアツテシキに居て此を呼ぶ
エゾといふ然るも日本國を總て松本島と呼ぶ

おくハ日人此ヲ授けり ^赤 あハ此全島をアイノト申て
住居一帳と謂なりし 尔後日人多く 帳
にありて之を押し其島名ハ松本の名を掩
を遮り今その人少く残されり少許の
アイノト申て 帳夫の名を存すと云ふ此輩
此島より遠きればエゾ北名ハ全消滅す
予長崎よりエゾとマツマエは向し島なりと云
ぬ又ヲクエゾ一名大エゾと ^赤 あアイノに属する

名ヲ以テサグリシ誠ニヲクエゾト名クあるん此者ニア
アイノは南方北ケルリケ諸島をヲクエゾと呼ぶ
ト是らも亦嘗て同所なり 諸島を以テもア
ワ湾ヨリ也
此名を以テサグリシ
如何にしてサカリシ北西濱哉ラベロウセハ此を
エゾといふや亦あすもサカリシ

此名欠

サカリシト云
ヲクエゾト云ク如き同義名何有予考に
サカリシトエノ此名最正一ト云昔より地誌家

欠

この部よりして 特子 エゾ此名を最古にして日
本に此子松前此名を命せりて古名を掩ひ也
日本國改の歳一五〇〇年其國界僻をの交
渉せし行儀より見え此部保申拾中子使節より零
細の品を贈るれり 敢て其又我々の所持の日本酒
とを食せりし一盃をり 飲をを憚り借此見え
後此部は居て日本商賣のアイノと交易する哉
監守する者よりしてアイノより 乾魚 狐皮 狼皮等

を以て 烟管 煙草 漆凍 器 又 糸子 皆も也 予り 此より 漆を
アイノも用ると 掃子にて カムサツカ土人の如く 此より 漆
以て 常食とす 日本 高貴ハ 漆草の内此子 在
此より 自云 冬ハ 此をきて 松前子 返之 松前子 是 彼
家族も 居となり 此實子 然と見え 彼ら 居家も アイノ
小今より 好まざり 和人の 清漆之を 好む 漆草の 樽造
とは 金器 製する 志ハ 此より フキスマン 哉より 知れり 漆
草之を 製し 又 フキスマン より 魚目 西世 同を 製し

として魯西面言成云たり又後ヨコロと與之孝道は
飲終て其コノ成創中し由魯西面人の作法の如く
も也飲する事成す此の時我等此ノ目と附くもれ
は彼直ヨ是ハ魯西面人の作法なりと云ふ又彼
ノ記帳より而の魯西面言成我等ノ同族より彼
初め我等ノて請厄利西成ハ既雪降の人なりん
魯西面人ノ事述すと云へし是ハラキスマン並ニ其
従属の人も頭髪を結ひし事志ハ今度我等の同ノ

兄弟の如き所也と此説ハ甚日形人ノは尚然事解して
日形人ハ既子歳一日のとき其髪を一方ノ其レ
結ハ風形ノ今我等ノ僅ニ十二年此内ノ以前と
既髪ノ状整へたるを以て整へ魯西面人ノ髪と
思へり實リ理也彼又我等ノ信々ハ今度魯西
面船長等ノ来リ日形人ノカムサカ子ノ破船セ
者五人を送り返しと云ふと云て彼等語ハ魯
西面人ニヨリ二回日形人を送り來りハ與之語所為

よして魯西亞國の日本人と專を施を種英する意あり
と云ふまじり我等ハ即其日本人を送りぬしつるを
ありと云ふ事は彼國て大に怒り又我等ハ二十日舟
以前長崎を出帆しつると言ふ不彼意安かざる換
子まゝして終に我等此を出去べしと云て別れしり又
今我船を泊すも不春暮すは較々暴風雨の當
る有る危き所ありとの様々此落着ぬ手祝を述
内も^{ボニム}ヒユレム此句を多く云ておぼゆる速に我等を

お拂ふの船来しつる好まは速に此を出帆せしと云
存に我等ハ此は長く留まじ用事あり明日も天
清朗なる船を出して此は對する地を眺むるへして
我等彼と親友に別れし心だして別れなりぬ
此日終日日本商賣及アイノ等多し船来りつる
アイノは乾魚を以て古衣取に^銀銀を換へアイノ最
好む前と云ふ此を鯨に換ふ甚鯨ハ我等ハ見と稀哉
好むなりと云一筆黃銅の^銀銀鯨魚五十より百尾ある

てきり日本商人烟管漆塗の盃挽及草紙春帖を賣
る草紙は猿轆の画阿多ものまで日本人の好みもの
といふ由何もの物かは松家府より此もそも持来賣物と
ある也

蝦夷島の北口ヨリツツ湾は此島の北隅とリウヤ岬
とは由りて圍む此兩岬北東と南東と南西と南
半ありお新新を間十四里あり此大湾の南側より一
里にふい入江ありて名別は湾内ヨリロミンツツ岬北南西

端より一里半あり北東に在此小湾北口十尋半の深處
にナデスナ泊を碇す水底は厚さケレイに細砂や交え
碇をよるは甚力を并ひ言好碇場之碇場北南差南
東は向ひて潮浅く潮七尋に到り此深より陸まで二里を
距る其一里半の間に甚く此一を涯より二十尋許八
尺より十尺と制此泊す中ノ潮の退此度を踏らに
濱涯を満て著く是へさしし天氣ハ雨以霧多
何し存し羅盤の差を踏すを好く然も此湾は入江と

此島てラペラセ峽に入少し後その陸を比較し等し始り
陸場緯四十五度二十分 五千秒経二百十八度零九。
〇と云

五月十日午 船六時を發し我等學士對するサカリン
即日本人のカラフトと名く島を以て 風は北西徐風を
以て船を北差北西を以て行きてラングン峯
の由是ハ東名カイシリ 等

フロウクトニ此島をペラケドハイストラ即 ビーキーランドに

峯名

東名ハチモシケト云其島の北に在島をテースケト云と
其土人彼船を以て其の説所なり 而日本人及アイ
ノ等ハ此ニ島北名を以て第一をリイシリ第二
をシフェシリと名くと云 リエイテナント 役ホーシトフ及
ダイトフモリヲシリ及レエシリと名くと云日本人島に
リイシリレフエシリと 記其前と少し北達する島あり
リヲシリレフエシリ此名をホーシトフ及ダイトフ其
島ハ上陸して聞所ありハを實に近きとせん

ラペロウセは此峯北高を甚くを傍りて後地より見て
此峯を帆夷の屬と云ふは歟我等も此島を帆夷
北間を通行せしめて遙く之を望みて志を以て誤
るべき

ブラウトン北後次の航海は此峯北西に針路を取て
帆夷地の四十五度より四十五度十五分に至
る間の部を度るなり彼帆夷の北に一島ありと
其日平人より帆夷の北にカラフト此一島を記

す多岐ハブラウトンは嶽と云ふ我船ハ帆夷瀕分
僅二里半ニ里北距にありて之を元を以て然
らざるを以てもブラウトン北説を實とせしむべき
ラングレ峯ハ北緯四十五度十分。西徑二百十八度四十分
七分四十分五秒なり是ハ星学家の諸説と我等此峯
を以てより諸島岬の測と比較し詳に測定するに如かり
ラペロウセの島ハ北緯四十五度二十五分。西徑
二百十七度五十分と一此記行を以て若ハ北緯四十

五度十五分とす其子差へり何者ぬきはラベロウセ北
旅申日記とデゲン北校ふとと比較を其ハランゲと其
は緯四十五度十分四十八秒経二百十八度三十八分十秒
とす下ノ此より緯は十二秒経は九秒を我等の測と
ス差へりとす又コンノイサンセテムス 蓋按記行虫の
名デレケレト
にも別の経緯を記し北緯四十五度十分経把
羅斯の東百三十九度四十分ゲレニイク北西二百十
七度四十八分とす

ブロウクトン北地界に此島を北緯四十四度五十分西経
二百十八度五十分とす其日記には経緯を説すブロ
ウクトンの船長の北西隅北緯ハ我測と甚相同し
而して是と作りに於て差ある不疑なり其日記を
見よ子七百九十七年 寛政九年 九月七日四年の測北
緯四十五度四十分三十二秒とす此時ランゲと峰
和東八度三十分里と在と此より由て測上の四十五度五十分の
是ハ此峰を北緯四十五度〇九〇とす一ブロウクトン北

紀行書第四篇二百九十一葉及三百八十七葉に如
此ラペロウセとブロウトン此ふよ此岸の方置且是
阿るは各々日記紀行中其所以を徴する可なり但或
是を作其測量方角距離の推量よりし且粗鹵に
て其方角を詳す又其鑄板の差錯ありは宜し作
者の誤とまへし予諸地の経緯を測り直之を測定
し其ハ數々経験するの法を流航海家の從事よりハ
コウヘル此規則よりハコウヘルは其測法より詳西數

明細なる人の~~致~~^正及まふかきまふ此妙なり名家コーク及
キングと相違する者なり今予紀行中に卷ら測量ら
実測するもの程式果すと其あるん然も其差甚僅
少なり予故に日記には致せしもの
第七十一頁ニシテニミリ島我より二十里より二十五里を距て
南西七十五度は是ら此島に已に十里は露の肉より所を
著し其大なる其中央に高く西側に低しリテ此島
北北西差北に在

フロウプトンは此島に我より北を寄て見たると見
えて其長北東より南西より十二里ありと又此及びチ
シリマても其土人をアタラシと名

ラペロウセは此フユニシリを^程船の程に足すと見え
彼をギエイペルト岬と名く是れ島に在り左シリ島
の北東隅を其名を命し減測北緯四半度交二十
七分四十五秒西経二百十八度五十六分〇〇とす
ラペロウセ岬を渡り時は風式北又北東或東差

南東とあり船の碇場より海流北より五十分た増
又或ハ二十八分は減測船乗渡の方其底細砂にて
サカリン流の方其底はコラレンと小石なり又三時半
は我より北サカリン北南西隅は小圓の礁をアタラシ
はラペロウセの記を有者なり此は陸より少の離り在
る五時は北西より一島をアタラシラペロウセのモニ子ロシと
名く有る又其北東より一礁ヲダングレウセと名く有る
ら此名は官に於くと名をす此礁は水南に在の如く

又ラベロウセの記する一中礁キリロン岬の端に在り
る多々、時風甚微し、船を南に導き、夜中風止
唯南西の微風あり、如く海深二千五百尋より二十八
尋に至り、底は礁石とコラトシなり、潮流を船を
東に流せり、曉に至り、船頭の遠濱を南と東に當りて
明に、是より船の基地を距ハ九里に過ぎ、りウヤ岬の
其濱は全東を^北なす、大湾の南に傾くふあり、そのあり
高く雷に掩へる山と連り、岬あり、其山は一高嶺あり、我

より船頭濱を見、北極星とす、此嶺は北緯四十五度
二十一分、西経二百十七度、早八分とす、然るも其距離
を夫々^暗氣晴して、此例を詳明する能はず、甲
比丹ラフリースの旅伴の名を殆ど忘るる故、此を挙げて
此をサーブ岬と名く

此より予船をアニウ湾に導き、此アニウ及パナインセ北西
湾ハ已に阿茶院人の所といへども、予サカリンをキリ
ロン岬よりアニウ岬サカリン北盡頭ラベロウセの測程也

所まで盡く検査せんと欲す也阿蒙院人の千七百年
代の航海名阿蒙者又ラハロウセテフリースと共
名家たりといふも亦も念此地方或別子洋に検査せ
むする北志阿蒙なる甲は丹テフリースの如き此西湾
に於て已に差謬あるハ下條子見たり一亦此検査に
時日と費まも止と欲得さる所なり

約九肘ウケレシ之礁を船の両子んて二里半洋退
行海を測るに二十五尋の深底の礁石上は小石阿

とす礁上は数多のコルリエスありて悉くはさ啼聲を
作と船は慥に聞えたり此ラゲンケレラセ礁我測
り北緯四度及四十七分十五秒西経二百十七度五
一分十五秒とすキリロン岬の南緯四十八度五十分十里を
距ラハロウセ北測とい僅の差とす第十時十八分に
キリロン岬の西にありアニワ岬の北に已に北緯七十九度
十五分第十時三十分は此岬の我より東にあり正
午の測緯四十八度五分二十八秒とす此は十秒乃

差も如く天氣晴朗地味甚潔淨外きアニロ岬の
方置ハ此湾をあらけり再詳トせんときキリロ岬ハ
我測ト緯四百五度五十分十五秒経二百十八度二分
。白秒とす。エロウセの航行も地味も此岬を北緯四百五
度五十七分。経把理那北東四百四度三十四分。
とす但ケレト北緯四百四十分規第九號北表は
前篇對ち及此前條 其校正北緯と云ふ子七百八十七年
レクニ峯の設より也
等八月十日北緯と四百六分二十一秒の差あり

子七百八十七年八月十日第九號時規の校
正表は四百三十九度三十分二十九秒と云ふ十日
正午の點を四百三十二度二十四分とす是れ其差四百
五分二十一秒とす也

此由キリロ岬の経四百四度三十四分。を四百六分二
十秒減して把理那の東四百三十九度四十分二十九
秒と云ふニイタ西二百七十七度五十分二十一秒と我
測と四分半東とす。而してケレト峯に於て也

アニワ湾の西側は山嶺相連し彼等は積雪を掩ふあり
北差北東に連る瀆は山の陵邊より所の平地各より低
異りて全雪を埋むあり瀆涯は峭巖なりて其岸
に一二の入江のとき所と湾と名し及ち手涯より
七八里の海に流すあり辛み厚きあり底は礁
なり又アニワ湾の東側は秋より甚遠く明り見事
能き及アニワ岬より北へ行く北より次々漸く西に
廻りて其端より西に瀆あり西より差出此より湾北

終りては甚地北より南に連る此差由より端は阿業
陀人のクコリイアニワと名けし一雨れん彼湾をサレハ
イコホレニバリーと名くタコリナアニワは其南東端なり
今新日本船我船の首を過るとんり我此湾に入ん
とす時その船は湾の東側に向ひしあり其處には
日本人の運上倉所ありは下よ記する如し
峯は村は北より南に一峰をえラベロウセのペルヤト峯と名
くるものことんり峯は村は下よ湾の終りん甚地

舟より漸く減りて七尋あり底ハ軟弱緑色カキ
あり八時陸ノ小村向る處ニ舟を碇りて此ノ島
船の播河者棄來り此島よりベルセト峰ハ我より
北東五度タマリニアニワは南東八度下南ノ船は
をき陸より二里を離る

此邦ノ日本北運止倉所にて下ヲ祝ハル
次日第十時ノ了使節と我ノ彼日本船 至ル彼
丁室ノ子應接一酒飯烟草を出して食ハたりて

日本人我等ノ手んせり零細の品を呼羅呢と換んと
欲する念阿とも其頭役を畏て為却と云彼云
此處ノ役人二人何リ我等 我ノ交易此島ハ彼等ノ必
買物と云ると又話ハル其船ハ大坂より來る者ナリ
船ヲ換むハ末と換るを以て毛皮及專乾魚を換
取ト云ル船中總て乾魚ヲ船底ノ魚を於て換
をよき何事桶ヲ漬ル如
平波ナリ何ノ岡出んと欲一先岡女子カラフト島は

如何をといふに彼は此島に廿六年日本人ハカラフ
トと名く然るも其主人はサンタンと名く故チカラフト
とサンタンは同一島なりと又云此島の北方部ハ志
波といふも関不ハ大地と別る津戸有り但此津八九
尺子過て大船を通行セしめは彼謂く其津戸ハ鞆
鞆の間なりとは是はラベロウセも船を遣へるは此
此子物ては此後我等の検査する所也
此島子居る役人の帳表の北陽子在役の如く日本人と

ア、此交易を為すに就て日本政事より置所なり
是ハ商賣此利を貪り執事過りの限なきを防監
あるの爲子設くるものなりと然るも又日本船支より関
詰所にて此役人のことを存も必思子合すとされ此
船支ハ千八百零四年^{文化}第十月其船をホロコエル
島^{蝦夷地}の内^{島の内}漂着す予因年、第六月カムサツカに在り
居て彼子逢ふる小伶利の男と見えたり。彼ハ船支
地方の之交易を業とする者にて前年タリ、ケ諸島より

暴風子を破船きし此男不語一たはカラフ
ト島の交易ハ日本北地の人民不於て大船ヲ開存有て
此より知す魚ハ生活の第一物ナリ此交易昔ハ自由
なりしを年已来政府此交易を制して官の買と
なりぬと元日本の政道ハたは厳酷非理なりとも
下りて之を違背する事ある法とすとも官より
其魚を甚高價に賣し此は係り諸吏も各其算
を知らず自然の勢をこれ為す此地の民ハ強動を起

せたりと我等はカラフトに其倉所の新設
たり梅子ト見え彼役人の亦も倉庫も新しく又
令成を治りて物言ハ彼船主の語りてある事
此交易はコロンボフ湾のことハアイハ此船は来りぬ
阿茶院人のサルハリーと名付程の魚多し一所にて一二
日も魚を食ふ事ハ業外なり曉はありリュエイヲナント
ラトマフとトクトルランゲストルヲ我中舟にて此湾の東
側昨日日本船の入る處を巡視せしむ書後我等を

日本人會館を訪んと陸より上りんとせし瀟の激揚也
我早舟にて岸に附けし其の舟小なり北小舟あり
を二艘ありて岸に燈籠に於て波を濤とのありき岸
にあり見れば此は瀟に近し葎の湿地は生る外生植
す多し此は七八尺許の池の小川ありて瀟に流入る川の
傍に本葉の一人許に積りて腐りて總て春色
阿ふあり

今瀟の川の両側は在僅の家居の外は倉庫あり而已倉

庫に魚と米塩を充つる會所の役人我等も米穀を
貯りし使は彼より彼ふら聲をききあはし
此は日本人二十人許あり五十人許集り我等も彼も
敵するを怖る氣色なりき又我等も敵を御
子ぬきを見て其君を敬し此は産米き荷揚
船十艘あり庫は荷揚する者ともえ交易の船常に
日本海濱は多しある形あり十艘十二艘あり一艘
六百ト名百二十トンを積るきものなりラトコノタマ

リイアニワトシ見一會度ハ母より昔ニアニワ湾の家
一交ト見るとモ交トハアイノ北會百許何口敷三
百ト過ク其人皆魚を乾し又ハ魚を洗ふ業を制リ
又その交ト櫓何モ小船五艘ト昨日我等ノ見一夫
船及荷揚船數多何リモ交トハ此サルムバライヨリ小
まとも好き、破場ト云見何人の住居及倉庫ハ清
北山何モ石の円ト在モ會^ト船の役人ハサルムバライ
役人よりハ貴ト云元一刀を常持日本人の上座と

るものと其役人の物よりモモ草を高く掲げ魚
酒を食し少も發音の危なりト云
サルムバライ會船の定子アイン北山會あり本海子造了
軍卒の小屋の如く狭く長く其内ニ軒全く日本薦
席をして覆らるありて其内ニ婦女子居り此處
酒亦小屋を以て此處を以て地方より冬城隈く魚を以て
此の時暫時の住居多々冬に住居ハ別ト深く陸地ト
入てありト云此處ハ時夏ハ月魚を捕る為ニ海灣に

をく役者さうまのりし

我船を船多くある北緯四十六度四十分十五秒西緯
二百七十七度四分〇〇とす日中入會前小川の口は
在我より北西四度五十分二里半あり川の口は
北緯四十六度四分〇〇なりカストリコム 名船
北緯明やるよりい

此圖は我 把理形レクルク君より贈る所也
此河を四十七度五分ありは我より五十分の差あり

タコリアアニツに於ては我側より從て四十六度五分十五秒
二百七十七度四分十五秒とす其差僅に十二分あり
是所人馬の海流を記さるは詳細なるは其流口岸に近
減し其底に堅きケレイに細砂を交りと然るに岸より
四里半減すふある底にケレイを堅く其色は緑之
アニツ岬の口の底底石は細砂を交り總て東側は西側
も其流は一同なりとすアニツ湾は北より南よりナルハ
イハ其流は在て南風より南より安穩なりとせ凡そ彼流

此激動強く殊滿潮は甚なりと予知る日本の庭
平き前揚船は常に此を極往來せり我等此は泊
する兩日の内夜おしく陸の方より徐風何うて濱津
此靜なるより有然も船七時には風又南と氣終日
強く吹たり潮の干満の極細例と事能きししり
大抵新月と満月の五時半よりして多くの差は有る
かゝるを考ふ

を好くは正を及ぶ事なるにアニウ岬の空は好港阿
らん我等此を出帆する時は風強く空晴く此東側
を要要巡覽する事能きしし之を此港は好港
何れは歐邏巴人の商館より便宜なる一此は歐邏
巴産の品を集めて日本人朝鮮人及支那人と交易
せし此等の人多く其土産を以て此より來りて交易し此地
方北乾魚毛皮の類は多く此は集る一カムサツカも此は
歐邏巴産物を送り彼地はサヘル皮より外は産物少

所あるは諸物を交易するゆゑに依りて鯨魚の最多所なりと他はなきと稱する少なりサルバール北内鯨満て船より陸にありて樽を用て之を運く事なく此湾の出入は船の周ハ鯨を圍またり。ハ子シセ湾にも多夥しく鯨を捉らる日本ハ此鯨の獲成始りぬすとも自然とも之を捕ら其油を大利を得し且此はカセロト鯨の一種もあらず一魚之を捕ら其ワルスコトとアムベルとは鯨利を得る前までワルスコトは日本

まで多ク鯨油を用ひアムベルは薬用と貴き都兎格人此如く此を用て功事を盡し其貴きとある也
ケニフルの日本記事に彼が舟の貴き醫者の傳へるといふアムベルを用て薬方を記さる其第二篇に云る
サルバール北後大なる谷ありて海潮の舟を通し其處に倉あり前云如く此谷の如く好みに宜敷と云る谷の兩側は好いインボームの林あり此木は家作に用らる好き魚を造る事も宜しき好き用也

産平水、荷揚船、獲り、此木と云え、此濱杜、
及蟹、蝦、を生す、但野獸、此、来、り、と、見、何
者、あ、ま、は、アイノ、も、甚、首、長、も、一、塊、^柱の、鉄、砲、を、取、持
せ、ぬ、と、思、も、然、り、と、思、は、彼、等、鎗、を、用、る、我、等、に
威、光、を、示、し、此、を、持、り、来、り、を、見、し、く、備、此、等、の、魚、
を、産、ま、る、ハ、兩、會、前、に、アイノ、四、百、人、餘、も、魚、を、乾、
搦、一、日、中、に、積、出、ま、の、業、子、たり、居、り、て、甚、勤、^ま、ハ、知、し
又、魚、を、捕、り、も、網、を、用、^は、唯、漁、の、于、た、る、時、に、捕、ま、之、を

を、く、ひ、取、之、如、此、産、物、何、も、亦、國、法、の、嚴、重、然、も、アイノ
よ、ま、監、守、何、も、日、本、北、地、の、賤、人、此、子、来、り、て、私、に、甚、魚、
を、取、を、極、ま、る、と、能、先、に、所、以、之、但、是、日、本、吏、司、の、我、
欲、知、者、す、ハ、歐、羅、巴、人、を、此、子、主、と、し、め、は、アイノ、に
於、て、此、事、は、容、易、に、免、ま、志、を、へ、ま、と、あ、ら、ん
アイノ、を、取、て、之、は、搦、ん、り、ハ、亦、も、難、事、と、思、へ、る、
此、等、の、日、本、人、ハ、兵、器、の、用、意、を、多、く、防、守、の、慮、を、有、り、免、
え、し、と、思、た、り、又、此、等、を、人、子、を、奪、ま、り、た、り、も、日、本、の、政、家、之、

を返す事死に容易に仕難かる何者かは彼を
取返す事必勝の計を施し難事なりと云ふて戦員
る能く其國の威光をおどし其國民は危懼の心を生
營内の騒動を起し其の政事は皆令全帳夷を失
ふすク危難を此一舉に生する憂何より必
之を取クされ一とて大軍を起さん軍艦の備け
鉄炮なく海軍の備なきホはたとひ防衛の法なき
アイノなりとも之を拒み其一寸北地をも彼を取返さず

非す其十六日の砲を傷るコッセル二艘は兵卒六千を
救せ風は強して之を亦しめ是日中大船許多は一葉
此兵を傷へたりと一具も亦崩すホ也如此アイワ
を取クんクより易かる一予之を計る事
之を取ク一一滴の血は費すも及まば又之をちるも
少も危難なりとありと一帳夷の北定は元より日本の
兵士あり唯其南側は少の兵ありと云ふ然るも此島の多分の
曠荒して人居なく且雪山相連り南北相阻絶す故に

相前より一隊の軍を此北を^送送る甚艱難事と
志すべし其國主の勢を其艱難を憐れしめて
致すも是其軍兵をアニワは^兵賛とらるるも其喜畧
程用ひて海に沈むべし何者か是は歐邏巴の一軍艦
まて日中の大軍を殲するに是レリ又陸に陸十二
門の砲臺も銃士百人を領へ彼兵のアニワに上陸す
る者を破りたるべし曰く此の如く扱ふは此地を奪ふ
とも反て後難を起すを阿す也サカリン人他二三

此歐邏巴の人於てよりも能く日中人の服従を要す此難ハ
然るも此地を領はサカリン本土の人と與らざるべし
アイノを服すも其は在るも其は此東洋に於てアイ
ノの服従をへさざるを憚るる事也アイノ人のアイノに
過すも其仁愛を以て扱ふことんぬ是れ其地を治るはア
イノの恩を施す彼を以て地をの愛する也其地を
一のぬ損す一恩も其法も常に其の如くして其法
歐邏巴人の商館をサカリンに置れば人と其交易の便す

屬き捷法より予廣く之を説き及て其時甚愛をい
ちんま此地の福厄利西人の東印度より伊初把作西人非利
波那諸島より容易に東より一其申すも最をい西
西人カムサツカ或止白星北の地より此より動の時速也此
の便宜地とも今より於て其事を起すは其地を歐羅
巴と魯西西領北部西細亞の諸地は海土の交わりと
時よりカムサツカ及止白星の甚く其人民の不足なる故にして
其隙とするなり

予此行より歐羅巴より返りて聞よカールベルレサラコ
ゲアカは逗留此中は一隊の兵を遣りて日本の北を
を侵しとすと然るも其兵は保続の企あり唯アワ湾
の日布人會所及船夫島の北隅を割したる也
予アワ湾の航を終る程此は船夫の北部及サカリ
南部の土人の都陋なるを記し歐羅巴人の言ふ此地方
の人知と稀なりは此より奉て之を志しむ
是は船夫の土人をアイノと名くを説くサカリの南地の

我々陸に在りて婦女の小屋の外に出る。となく一交り
集り居るトクトルテレレウフク彼を以てたるい志困り
とら扱子也キアイノ此性い愛子正直なりと其形状と
言語もそ然とさう我々之を感ずる其形の質樸れと
其性の正直なりと合相應する其心も其の生進なり
我々之を我欲又貪欲の業は東洋の南方諸島の鄙
人より何と云はん此地の爲には全境界を異せりと
内ロミンらつて船に魚を持来りたる時も彼直り

我々も魚をよひたりてかも其價を要する氣色なく
我より彼より與へたる魚は我より協ると見られとも
真子之を取ると我より我より取ると云ふ
して後で取て之を取むサルムハ一トそい士人等船に
来りたりあり之を感むるといし、あるは日本
の之を禁中して然るなり
アイノ此衣は犬抵犬及海物の草也或カラサツカ人此ハルキス
似る服も見る但白き襦袢を膚は急なりアニワ人の

毛皮を服一 脚付も海皮を縫う ~~女~~ 女も同じ皮を衣と
せり ロマンリッ フマシハ唯一人の熊皮と物皮を縫う成見は
其他は皆粗黄色の布より木の皮を縫うもの ~~我~~ 我等
彼ッ ~~女~~ 女其樹皮を見一 ~~又~~ 又此一人の藍色の毛皮
を縫合せ服を縫う 貼裏には皆本綿を縫うす是ハ
日本より 換得物と云ふ ロマンリッ フマシハ 脚付を着るは
代子日本の ~~草~~ 草履のとき物を用ひ 稀には衣にする
粗布のお脚付を縫うすも ~~又~~ 又此一人のアイノとサカリン

北アイノ此衣後ハ ~~女~~ 女區別 ~~ア~~ アカリン人ハ喜阿 ~~ア~~ アハル
音器 ~~と~~ と ~~一~~ 一 ~~款~~ 款 ~~と~~ と ~~其~~ 其 ~~區~~ 區 ~~と~~ と ~~予~~ 予 ~~ハ~~ ハ ~~魚~~ 魚 ~~と~~ と ~~毛~~ 毛 ~~皮~~ 皮 ~~の~~ の ~~身~~ 身 ~~に~~ に ~~在~~ 在
と ~~予~~ 予 ~~或~~ 或 ~~此~~ 此 ~~を~~ を ~~日~~ 日 ~~人~~ 人 ~~ノ~~ ノ ~~賣~~ 賣 ~~て~~ て ~~利~~ 利 ~~得~~ 得 ~~る~~ る ~~款~~ 款 ~~抑~~ 抑 ~~モ~~ モ ~~日~~ 日 ~~人~~ 人 ~~ノ~~ ノ ~~拍~~ 拍 ~~と~~ と
區別 ~~ハ~~ ハ ~~生~~ 生 ~~産~~ 産 ~~と~~ と ~~す~~ す ~~も~~ も ~~阿~~ 阿 ~~我~~ 我 ~~等~~ 等 ~~之~~ 之 ~~を~~ を ~~志~~ 志 ~~す~~ す ~~所~~ 所 ~~ハ~~ ハ ~~一~~ 一 ~~と~~ と ~~予~~ 予 ~~ハ~~ ハ
日人 ~~ノ~~ ノ ~~賣~~ 賣 ~~物~~ 物 ~~の~~ の ~~あり~~ あり ~~と~~ と ~~賣~~ 賣 ~~す~~ す ~~其~~ 其 ~~人~~ 人 ~~多~~ 多 ~~ク~~ ク ~~一~~ 一 ~~頭~~ 頭 ~~に~~ に ~~帽~~ 帽 ~~を~~ を
~~被~~ 被 ~~ら~~ ら ~~ず~~ ず ~~或~~ 或 ~~夫~~ 夫 ~~レ~~ レ ~~一~~ 一 ~~等~~ 等 ~~此~~ 此 ~~帽~~ 帽 ~~を~~ を ~~被~~ 被 ~~り~~ り ~~頭~~ 頭 ~~髪~~ 髪 ~~を~~ を ~~剃~~ 剃 ~~り~~ り
ぬき ~~を~~ を ~~考~~ 考 ~~と~~ と ~~す~~ す ~~も~~ も ~~稀~~ 稀 ~~ハ~~ ハ ~~一~~ 一 ~~ハ~~ ハ ~~お~~ お ~~ハ~~ ハ ~~こ~~ こ ~~を~~ を ~~刺~~ 刺 ~~す~~ す ~~も~~ も ~~一~~ 一
婦女 ~~ハ~~ ハ ~~幼~~ 幼 ~~弱~~ 弱 ~~と~~ と ~~い~~ い ~~ふ~~ ふ ~~も~~ も ~~頭~~ 頭 ~~ハ~~ ハ ~~飾~~ 飾 ~~り~~ り ~~一~~ 一 ~~等~~ 等 ~~其~~ 其 ~~唇~~ 唇 ~~を~~ を ~~赤~~ 赤 ~~色~~ 色 ~~に~~ に ~~染~~ 染

歐羅巴人の紅毛玉やと希とする眼玉は甚醜くもろ
こを返して男子は耳環を飾りたる者も多し
大抵黄銅の環ありて一箇の少年より一對の耳環を買
しるる銀を以て贖還する 珍珠を懸けたりき其男を
之が貴重すと見えきんと二度お悔いて環を
取返ししるる物より價を求め古衣一手中ニ白きブ
リキを造り細工物を換へり

ラベロウセもラブレララ其土人の贖還の珠をえり

其他の古衣及^{ホタテ}鈕を以て彼烟管及零碎の品を換へたり
唯船夫人の持しるる物を珍しとする也

アニアラ見し少屋の前は夏に倣住居といふ但ロマ
シラフの人ありて其住の所を冬夏之は居といえり
我輩訪ふに二家あり其家の傍に魚を干し置り其の
家の大なる平屋を以て其前部は小なる障子の何れも一
面の廣き住なり其構造甚堅固なりすらんえカハサ
ツ方此れを全雪を掩はるる如行て其碇を以て

る也と不審なり此地五月に於てモメーレの温
度之度如きは冬の如き也此の地は極北の中央
に大なる地燈あり其周圍は家族西より居る家も在り
もあつた即ち日本座の席^席を敷けり其他櫃架の
類食器の類は日本製の漆器なり此の家内を巡るは此
地の人の皆くどし易きに見えカムサワカアレウナセ諸島及
コレヤラの人民は稀なりとす食糧とするは乾魚を製
せり船は甚良氣あり然も土人之を嫌ふは其

要とするは食糧とする物なり其國を被るの居るは
大抵海濱に散在するも此處を得のあり我等此の
園圃を見なく果蔬の植物をみるは又家畜の鳥も
牛馬も無く唯多くあるは北に也リユイテナトコロツコフは
狭き一所に大の五千匹群居するを是とす此の地は
此を以て多し於て極に用る物なりアニワ海に於て
人民は極北のカムサワカ人のナルテと名くと同形ありし
又大皮の服はすなわち要用の品とす諸我々^{我々}致馬きこは

帳者北隅の人、雪水を常に飲み其を川水の
良好なる何れと云ふも之を引取らざるは
氷を思て然らば彼等雪水を用ひて
上と雪水を用ひし時ハ必雪水を用ひし
人の信習と云ふ何れか、熊の稚き我畜あり
其家の一隅に之を置て遊族の如くす、取ては
其き伴あり、我船士某其熊を買んと欲して
之を主とす、遊族の外を授けし、此水、日本人は、

め難き前としてアイノ為には、其の物と云ふも其
熊を手放さざる、乳見の如く、終に賣らして
止る

アイノ此行ふ法制と宗教を詳しと欲し、其の
此、逗留を、僅して之を探り、熊を、其の
衆寡、少あるは、定く、一宗より、外何れし、
或は、刻し、其の、遊族十人、作何れし、
一、意の如く、全相和し、其の、一時、其の、

居る事とも種々家族の首なるを見却能く其時其年
長一より若ハ其年少き者をおしく引信しやうふら
而已我等彼に贈り物を分與す小舎く一等事して
よきは彼も一月より満ちるやうをよき其年長
者他より私物をおしくしよ此れを以て其
世の八輩許の小女を我に首と乞其食も彼の好し任す
と日を泣きしころありぬ其の愛の一種静制の甚
性質の善なる可成り彼に聲より多言あるなり是夜

の大笑ありそよよお進となりて其は珍しき良
性ありと我等の感あるを彼等ももよもや彼等
ゆるまむ甚きを我等が煙室に居るんとそ席を
敷尺我等の通りは清浄な越さるのんとそ我等の編ま
の衣を解んとすをえり直しそ早く彼も舟を解
渡し彼等の我敷を被り物を得んと欲するを
めまらあまはむと甚き憚りて致て之を取捨ラヘ
セウサカリン此西例に過さる土人の説は太夫懸隔也

是彼等の教道するより非を以て生得の良善なりに出り
今より凡そ所の僻遠の諸地の王人はアイノ城等一
等と定めしむる

アイノ此数の官房事ハ己ノ前にも説きし如く船夫の北陽に
控へ唯今何れ一戸十人何れ一戸一丁として僅半人なり陸地
沖く亦く住居何れし何者好むは彼ら食糧は唯魚と粟と
まれば其人必海濱に居きたりサルムバトイと名リイア
ニツト在人数三百と過然とも其時魚を漁するに始りて

日本人も其魚を取るより其夥しき魚の製法は
必近傍諸島の人も此より來りて其法を助くも何れ
き也其他亦より此より集りて其の伝授は日本人會前
北傍のアイノ北山原の假居なる此の島にゴロツエスル
一モルドイフリ島には僅に留居する者の其の器具と
守り何れを以てしき船夫の舊記は信に此島の王人
ハ全神に毛を生く何れとて考ら始り船夫人を記
せる支那人より船夫を野人の住する一大國と其人

全男子毛生し鬚老く飲と紀^レ之を擧ぐると子六百
甲子之年 阿基陀船中^甲比舟フリース子七百三十五年
魯西亞船スバレルケ皆船夫は別又皆舊記の如しと
云如此従来の船夫人の説皆毛を生まると云ふも名此
説を信し^レと^レ之を實檢する所も^レ舊説全く作
話も^レ浮説ならむ明す 邪蕪舎士アングリス子六
百二十年 ^{天和} 船夫也 訪^レ自歐邏巴人の物なり
彼時其人^レ鬚を生ずると云ふ^レ毛を生ずると云ふ

是此人ハ船夫人と文親しく其体とん^レ者も^レ阿基
魯西亞支那等の^レ人ハ推察の^レ説子^レ船至^レ字^レも^レ西を
記す者^レ予^レ我^レ等^レも^レ船夫北陽^レも^レ人^レ一輩^レも^レ勁^レ鬚^レ何^レと
髪^レ也^レ目^レ上^レ子^レ垂^レる^レを^レ舊^レ説^レの^レと^レく^レ身^レ体^レ子^レ毛^レを^レ生^レず^レ我
等^レは^レア^レニ^レ汚^レし^レ於^レて^レハ^レ彼^レ々^レ脚^レ子^レ脚^レを^レん^レと^レ教^レ人^レある
く^レ總^レて^レ身^レ体^レ子^レ毛^レ何^レ者^レ多^レく^レ今^レ舊^レ説^レの^レ虚^レなる^レを^レ知^レる^レコ^レソ^レ
ツ^レエ^レソ^レハ^レモ^レル^レト^レイ^レフ^レ汚^レし^レて^レハ^レ氣^レの^レ小^レ童^レの^レ全^レ身^レ子^レ毛^レ何^レ
也^レも^レ然^レと^レ其^レ又^レ及^レ他^レの^レ成^レ長^レ也^レを見^レん^レと^レ歐^レ邏^レ巴^レ人^レト^レ夫

これより七百年と云ふ古今航海者の説を直に信じて
物事を欲するに然る事あり考ふにアイン北多南なる南方
名り諸島より遠く今に居る一處に在るは又は
勁き鬚毛多き一面既髪を毛と云ふと其後の清林を
らするとい阿基陀人の事印に甚体と云ふ
面の如く毛あり下と云ふ其身體を足すと其
説を為しと云ふ人皆此説に從ふかく云ふ
な季

